63
173

基督すがた

特 18
749

本書の著者い蘇國の自由教會にありて壯年宣教師中屈指の秀才なり。氏い其本國に於て教育を受け、後ち獨逸よ遊び、生涯の事業たる福音の伝道に適當なりと思ひ定めし種々の學術を研成したり。氏

東京大學圖書

の夙めてアバディーンなるコルクカルヂーよ於て牧師の職に就き其の間雄辯なる説教家として、非凡なる神の道の解釋者として、名聲藉甚なり。而三年前氏ハガラスゴーなる自由聖、馬太教會の招聘を受け、人々の上に縁と厚く之を愛したり氏い同地にありて非常なる勢力を有し、且つ熱心傳道の事業に當り以て氏が頗る有用なる人物なりを證しれり。

ベルファーストよ催ふせし長老派同盟會に列席せし人々い、氏が難問を處斷する技量を實見したり。其の著基督傳及び聖保羅傳は釉珍書の名を以て出版せられたりと雖、結構斬新、文体明了、所見該博よして且つ

暗示的なるを以て著いる。

氏が己れの新機軸を用ゐ、又至深なる敬虔の念よ基きて基督の摸範を描きし本書「基督のすがた」よ於てい其の論する所前二と同書一の性質に富めり。余輩い本書も亦冥想祈禱の伴侶、人生の指南車となすよ適せるものとして之れを推薦するあり

一千八百八十九年十一月二十三日

ニウ、ヨルクに於て

ウ井ルリヤム、エム、テイロル

自序

若し差支なくんば余いバンヤンの語を借り來りて本書の起源を有りの儘に敍するを得べし。

もの書かんとて、初めて筆を執りし時にい、斯る小冊子を作らんとい心掛けざりし。しかるに又ほかのものをも書かんと思ひ立ちぬ。その已に成らんとせし時、またもや本書よ取り掛りぬ。

余の基督傳を著さんとして、此の問題に關する諸書を廣く渉獵するや、基督の心術及び教訓を論したる書籍い今日の神學よ最要の物なるべしとの確信を生じたり。余い數年の間此の勞よ從事したりしが、偶余の進路を遮りたるものあり即ち特よ倫理の部面に於てい耶蘇の教訓その言よのみあるにあらずして又摸範よありとの事實是れあり。當時余の意い單よその言より教訓を得んといなしたるなり。此を以て余い只意外よ集まりたる餘材を使用し盡さんが爲めよ基督の摸範よ關する

一小冊子を著いすことなりしが一二章を超ふべしとの豫想い毫も是れあかりしあり。されど筆を下すよ隨ふて愈延長し圖らざりき一新書の經營自ら余の心中に成れり。余い之れをバンヤンの簡潔ある語によりて云いんとす。

結構已よ終らんとするに、何は引くよ隨ふて出で來れば、遂よい見らるゝ如き大部のものとなるまで、筆を擱くよ由あかりき。

本書の經營い自然よ成りたるものなるが即ち人生の圈線を両分して圓欽となし、各圓欽をして實驗及び義務ある大範圍を代表せしめ此の一々の範圍に在りて主が如何よ已れを處し給ひしかを考へ依て以て我等もその範圍よ處するの方法を知らんが爲め主の迹を追いんとするよあり。是れ實際的信仰的の目的よりせる、一の基督教的倫理學なり。此圓欽を更よ細分するとあらば容易く章數を増加することを得たるべしと雖本書とて人生の大切なる部面を不問に付せしとなかるべし。

余い記錄よりて知らるゝ主の言行の全体を窺ひ、一々之れを各部面に對照したり、而して一時い福音書によりて各部面に關する所有る證據を遺漏なく印刷せんと思考したりしが間もなく其の實行し難きを發見せり。蓋し證據の浩瀚なる、余の意外よ出で遺漏なく之れを印刷せんよい卷帙を倍せざるべからざるよ至りたればなり。余や主の摸範の跡を尋ぬるよ際り左して人生よ必用とも思はれざる部面に於てすら、其の材料の夥しきを見て驚嘆の念を絶たざりき。而して余い此の講究中僅かよ四福音書なる小區域よ蓄へたる財寶の無量なるに付て新しき感應を得たりしとを感謝の念を以て告白す。余は各章の初めよ於て更らに重要なる聖言を指示し置きたるが原とより完全と稱するよあらざれども、自ら其の證據を蒐集めんとする人々の爲めよ起點として資する處あるべし。

余い當今諸教會よ於て熱心に基督の摸範を探り且つ文献よ徴して耶

蘇が如何ゝ余輩の生活する此の世を送り給ひしかを知らんと欲する人其の數多きを知る。此等の人は時間の價値と其の嚴肅なるとを悟りたるものゝて又一つの無くてならぬとは、電光石火の如き歳月を充たすゝ、廣大有益にして且つ竭くるとなき生活を以てせざるべからずと感じたるなり。されど生活い基督の如き生活ならざるべからず。蓋し基督の生活は最上なるを以てあり。但し基督の嘉納し給はざりし生活い例ひ愉快と成功とゝ滿つるとも、彼等之れを價値ある生活なりともせざるべし。依て余い本書を著して基督を學ばんとする者の嚮導となし、且つ余は之れを世ゝ公けゝして此の人々が人の子の肖像の實相を窺ふとわらんを熱望す、

一千八百八十九年九月二日

グラスゴーゝ於て

基督のすがた前編目次

第一章　緒論……トーマス、エ、ケンピの『基督の摸擬』……十一丁
第二章　家庭に於ける基督……三十三丁
第三章　國家ゝ於ける基督……五十五丁
第四章　教會に於ける基督……七十一丁
第五章　朋友としての基督……九十一丁
第六章　社會に於ける基督……百九丁
第七章　祈りの人なる基督……百廿三丁
第八章　聖書の研究者たる基督……百卅九丁

第一章　緒論……トーマス、エ、ケンピの『基督の摸擬』

トーマス、エ、ケンピ？彼れは讀書中に不圖此の名を思ひ付き、世人も知れる如く、他日跡方もなく、記憶より亡せ去るべき名を付するを或る意味を以てしたりとて自から滿足に思ひたり。彼れは好奇の念よりして一卷の古びたる小冊子を手に取りしが、其の隅々は折れ曲がり、何時とも知れ難き昔し、人ありて之れを手にせしと覺しく、ところ〳〵朱線の名殘を止めたれどそれさへ色もはや、あらはならず。マギーは一ひら〳〵繰り返へし、其の記號のある箇所を讀めり……

讀み下す中に自ら畏敬の念を生じ、恰も半夜微妙なる音樂に夢を破られ、汝は眠れども覺めたる靈ありと云ひ聞かすが如くに感じたりき。……彼れは神秘學、寂靜教等の教義を傳せざりしも、遠き古より響き出す此の聲は、直ちにその靈魂の信仰と、經驗に感通し、即ち彼れの爲めに紛ひもなき消息をありき余は思ふ、是れ即ち此の頃發刊せらるゝ不廉なる說教集、論說集は物に變化を及ぼすことなきを、獨り十錢も投じなば購ひ得らるゝ古びたる小冊子が、今日に至るまで、苦きを轉じて甘きなすの妙ある所以なり。此の書は是れ心の跋舞せらるゝを待望する人の手に成りたるを以て無聊、鬱悒、煩悶、信仰、勝利の歷史なり。彼の天鵞絨の坐褥上にありて、足、血を滴らしつゝ石上を歩む人に忍耐を教えたるものと異なり。されば此の書は万世の末までも、人類の必需にして、且つ慰藉の記錄たるべきなり。

ジョージ、エリオットの「ゼ、フロッス、ナン、ゼ、ミル」中の一節

第一章

緒論

トーマス、エ、ケンピの『基督の摸擬』

宗教書籍中聖經と外よしてトーマス、エ、ケンピの『基督の摸擬』の如く廣く基督教會中に行はれたるものゝ有ず、獨り之れに拮抗して遍く世人に知らるゝの區域に遙かは、天路歷程なりとす。されど前者の基督教國に行はるゝ法王の書に神經質なる舊教徒か天路歷程を愛讀するの妨けとなりたるバンヤンの傑作よりも廣し。蓋し卷首に見ゆる大『基督の摸擬』に至りては、之れを己れの物として誇稱する教會內にも行はるゝと等しく新教徒の間にも行はれ又希臘教會にありても西部の各教會と共に遍く之れを愛讀したればあり。

一

此の書の著者は、新教徒ならざりしとの事實は、新教徒に特別の快味を

興ふるものなり時い維れ第十五世紀の初めよりして、ルーテルに先だつ一百年の頃い著者の盛春なりき當時い基督教の歴史中にありて暗黒時代の一に數へらるべきものにして神の光い人の誤りの爲めに全く消え亡せたり。實よ新教徒は改革前の一世紀よ基督教存在したりとい考へざりし程にして眼界よ映じ來る腐敗の團塊の大なると殆んど基督の宗教滅盡せしが如き觀あらしめたり。されど本書い此の感情を除却するものなり『基督の摸擬』は是れ基督教會決して滅盡せず却て神い腐敗の頂點よあるの日も尚は其の證人を有し、又基督はその愛する者を有し玉ひしことを告知する暗中の一聲なり。

實よ『基督の摸擬』は濁れる當時の痕跡を存し、書中近世の人の排擊する迷信の元素ありされど是等腐敗時代の遺物なるよも拘らず却て全篇に彌滿せる基督教的音調い一層驚嘆を深からしむるものあり。即ち基督よ於ける信仰を皷舞し傳へて世々の信者の肺肝よ入らしむる也

嗚呼我が愛する貴ふとき基督耶、穌至潔き愛人、万有の主宰よ。飛んで汝の足下よ休らはん爲め、我れよ眞の自由の羽翼を賜ふものい誰ぞや。

嗚呼、耶穌永遠の榮光の光耀、さまよふ靈魂の慰藉、汝に對していい、我が唇よ聲なく我が緘默汝よ語る。

我主いその降臨り給ふと何ぞ遲きや主をしてその賤しき僕なる我れよ來らしめ、且つ我れを喜ばしめよ。來れ、來れ、汝在さゞれば喜びの日も、喜びの時も、一つだよなければなり。汝い我が喜びにして、汝在さいれば我い筵を開くべき樣なし。

假し他人は其の意に隨ふて汝の外のものを求むとも汝の他に我れを慰むるものいあらず。又慰めざるべし。只我が神、我が望、我が永遠の救拯なる汝あるのみ。

本書は斯る熱情を吐露せる救世主よ對する愛よ充滿し、その尤も著し

きものゝ當時にありて屢、救世主の代理となせし者の恩惠を憑むが如き、又ゝ處女、マリヤ及び聖徒の中保を要するが如く、舊教の信仰書中に細說せる種々の援助を借らずして、靈魂直ちに基督に向ふものなりといふと是れなり。是れ本書中尤も健全なる部面よして、當時の如く、靈性は儀式の下に埋沒せられたる世よ於てすら尙ほ生ける救主と相親しめまん爲よ衆難を排して蹶起せし人多かりしとを信せんと欲するもの、歡迎せざるべからざる所なり。

二

『基督の摸擬』の著者の外形的歷史ゝ分明ならずと雖、「基督の摸擬」の著者は確實ならず、後世よも恐らくは知らるゝもなかるべし。該著者よ關する議論は一百卷よ上りたりと雖、既往二世紀半の間は、是非の聲入り亂れて何れとも決せず。凡そ本書の著者と稱せらるゝものは九人若しくは十人の各々其の時代を異にせる聖徒及び學者にして其の中三人尤も確實よ近し。所謂三人とはガルセン、ヅ、カパニス。ケンペンのトーマス、ヘマルケン及びジャーン、ヅ、チャリエル、ヅ、ガルソンなり。三人中の第一人は今之れを論ぜず。○されば著者の榮譽を負へる二人は一世の榮譽は著者が末節の順望なるべけれども――コローン教區の聖アグチス院の副長トーマス、

エ、ケンピ、とパリー大學の尙書ジャーンガルソン是れなり。○二人の生涯は共に同一悲慘の時代に當り國家政府なく、宗教衰廢し、騷亂腐敗面を向くべくも非ずトーマス、エ、ケンピは一千三百七十九年に生れ九十二年にして歿しガルソンは一千三百六十三年に生れ六十一年にして死せり。故に二人は四十五年の間、同時代の人たしり也。されど二人の生況は全く同しからず○トーマスは美術士の子にしてデベンテルに育養せられ一千四百年、齡廿一を以て修道院に入れり。彼は滋然寂靜よして聖アグチス院に七十一年の日月を送れり○。ジャーン、ガルソンの經歷は甚だ異なり。彼れは年三十にしてパリー大學の尙書となり。法王、元老、庶民、王者を撰ばず、常に爭ひをなし、亂世の亂徒なりき。一朝失敗を釀してより以來、人類の墓なきを悟り、退てタイロルの修道院に入り、後ちリチンに移りて其の兄弟の配下に屬し、謙遜溫良にして世を終れり

讀者と彼れとの關係ゝ親密よして離るべからず。彼れゝ科學的歷史家の爲めよゝ陰影よ過ぎずと雖熱心なる研究者の爲めよゝ其人物極めて瞭然たり、彼れが文体ゝ特異よして一見之れを知るべく、其の信仰ゝ熱心燃ゆるが如しと雖內自ら人の渴仰を惹くよ足るべき溫和敦厚の風あり。之れよ加ふるよ我等その書を繙けば、生命の秘密を感得せし人と交際を結ぶの感自ら起る。此よ一人あり、我等も恐らくゝ之れが爲め

に苦しめらるゝ憂き旅路と、我等が尙は陷ゐり居る種々の爭鬪を終へ、神の平和よ造詣り、後ち我等を携へて樂土を實見せしむ。是れ本書の慣手段なり、我等ゝ皆俗塵の汚す處とならずして、神の川之れを灌漑する樂園の世界の何處にか存在するとを竊かに信ず。而して若し一人ありその風采彼のエデンよ住みて、彼の水を飲みしとを確信せしむる徵あらば、必ずや其の人を歡迎し、其消息に耳を傾けざると能はず。されど此の樂土ゝ何處にあるや。是れ遠きよあらず。即ち我等の中よあり。『神の國ゝ汝の中よあるなり』。人已れ以外に幸福を求む、富の如き名譽の如き、學問の如き、朋友の如き、親族の如き、又新聞を告げ、新聞を聞くの類是れなり、彼等ゝ世界を漫遊して冒險的の探征をなすものなり。彼等ゝ富を求めて海底よ沈み、地腹を開くものなり。彼等ゝ快樂と奇物を求めて情慾の奴隷となりしものなり。彼等は相互ひよ鬪ふ、其の故ゝ彼等各〻自ら滿足せず、已が兄弟我が領分を侵すと信じ居ればなり。されど彼等ゝ常に足下よ散佚せる幸福よ躓づき、之れを求めて地極に至り却てその座邊よありて存するを知らざるなり。

人若し際限なく物を求むる時ゝ、自ら心に安きと能はず。傲慢の人と貪婪の人は常に忙はしく、心貧しく且つ卑しきものゝ、豊かなる平和の中よ住す。

我等若し他人の言行及び我等よ關係なき物よ煩はされざれば多くの平和を得べかりしものを。

他人の苦心に關渉はり、又ゝ遠く遊ぶの機會を求めて内よ省みるとおきものゝ爭で久しく平安に居らるべき。

先づ已れを平安ならしめよ。さらば他人を平安に導びくを得ん。

善き平安き人ゝ萬の物を化して善ならしむ。是れ已れよ勝ちたる人にして世界の主、基督の友、天國の嗣者なり。

以上の勸告ゝ世人が他の教師より聞きしものと相等しき音聲なり。自

己を尊大なる小天帝となして終りしストイック派哲學者の敎と相等しき音聲なり。人生終局の目的として自己の角尖塔を建つるよ汲々し他人の權利及び道德上最も神聖なる義務を犧牲よ供したる或近代の敎說と相等しき音聲あり、內部の人ゝ思念上最高の目的物ありとの說は一轉して尊大なる私慾の說とあるものなれども

エ、ケンピゝ此の僻說よ對して痛く排擊をあせり。彼れが尤も痛快ある格言ゝ、過度に己れを尊大ならしむるものを攻擊したるものなり。眞正の富と內部の幸福を求めんが爲めよ外部の事物を放棄せよと人よ勸むることあるも是れ我等自己の內部に發見せらるべきをいふにあらずして、我等の內界に屬するの謂ひなり。即ち我等ゝ內部に空處を存し置き、靈魂の唯一の滿足たる神を以て之れを充たすよ供せざるべからず。

汝の有する殆んどすべての勦絕克服すべき欠點ゝ、過度に己れを愛する一點に係る。此の失一たび克服せらるれば、大なる平和と安全直ちよ至るべし。

なんぢ若し己れの內部に適當なる座を設けて基督に備へば、彼れゝ慰藉を携へて汝に來り給ゝん。

彼れゝ屢、內部の人よ臨み玉ふ。彼れの交通は快く、彼れの慰藉ゝ樂しく、彼れの平和ゝ大に、彼れの親睦ゝ非常よ威あり。其の時基督よ座を與へ、他人の來るを拒め。

汝基督を所有すれゝ、汝ゝ富めるあり。彼れは汝を飽かしむべし。彼れは汝を養ひ、忠實にすべての必需品を供し、汝は人間よ依賴するの必要なかるべし。

基督我等に宣ゝく『子よ己れを捨てよされば汝我を見るへし』

三

エ、ケンピの著述の功績ゝ傲ひ難く消し難し。されど多少當時の時勢と境遇とよ纏綿へる欠點あきにあらず。

一『基督の摸擬』の欠點ハ其表面に存し、世人の屢〻指摘せし所なり。著者ハ修道者ヨシテ只庵室の如き單調的小天地ヨ處するの規則を要したるヨ過ぎざれども我等ハ自由にして且つ危險ある大世界ヨ住するを以て一層普通的摸範を要するなり。エ、ケンピ及びその同輩等ハ此の世を惡魔の所領となし、之れを遁れ、之れが羈絆を脱せんとを思ふて毫も之れを改良するの意なし。彼れ曰く、汝の力限り人間の交りを絶ちて塵世を脱離せざるべからずと。彼れは人生をすら疎ましく思ひ、其の尤も鬱憂なる語を用ゐたる文にハ斯く云へり。誠に此の世ヨ住まふは憂れはしきことなりと。されど我等の信條ハ幸にも之れと異なり

浮世ハ我等の爲めに白紙ヨもあらず、汚點にもあらず、其の意味深く、且つ美はし。

此の世ハ我等の爲めヨ神の世界なり。我等の職任ハ何の業務ヨなりとも從事して神意を成就し、神の道をして至る所ヨ行はれしむるにあり。

遁世説ハ是れ基督教より見れば、世の爲めヨ敗られたりとの自白なり。されど方今基督教ハ至る所に其旗を樹て、連戰連勝して進軍す。

二　本書ヨ附隨せる他の瑕瑾は博士チャルモルスの書翰ヨ見ゆるもの是れなり。曰く『余ハ近頃古今の大作なるエ、ケンピの『耶蘇基督の摸擬』を一讀せり。人ハいふならん、是れ未だ全く福音的あらざるなりと、然り彼れハ直接ヨ明白ヨ信仰によれる義を肯定せず然れども彼れハ此の教理を偶然に認承したり。是れ彼の常に之れを口ヨして極端なる正統派者流の行ひをなし、以て自ら已れの正しきを辯護し正しき言に對して必用なる敬禮を表し了れりと唱ふるものに比すれば却て其の心に確信あるの證ありと云はざるを得ず』

是れエ、ケンピの地位ヨ對する寛大正當の辯論なり。而して著者の時代ハ此の保羅神學中の最要部を再び公行せしめたる彼の宗教改革ヨ先きだつと凡そ百年前なりしとの事實ハ、之れヨも優りて更ヨ簡略ヨ此

の欠點を説明するものといふべし。然れども經驗によるに、基督を摸擬するとい〻其の十字架の血によりて罪の宥しを得たる後に來るを以て正當の順序となすといふことを特に述べ置くことい〻最も要用の点なりとす。

三　尙ほ保羅の説ける教理によりて、エケンピの著述の要部とならざるもの一あり。是れ即ち基督と一体となるといふ教理によりて聖保羅神學の兩極の一なり。聖保羅の教理い〻、基督の死によれる義と我等の内にあるる基督の生命によれる聖との兩極間に回轉す。後者は『基督の摸擬』中にも見えざるにあらねど、之れに重きを置くこと未だ足らざる所あるに似たり

蓋し基督の摸擬なる語い〻美は即ち美なりといへども、基督の民たる者が基督の如くなるといふ深妙の道を指明するに至りてい〻未だ充分ならざるものありといいざるべからず。摸擬とい〻寧ろ外面上の作用手續によりて甲を被へるものを取りて、乙に着するの類を云ふ。然れども、信者が基督に似たるものとなるといふい〻、單に斯る外形上の摸寫をいふにあらずして、基督と内部の一致をなすをいふなり。若し之れを摸擬なりとせば、母に於ける小兒の摸擬に類したるものといいざるべからず。蓋し小兒の母を摸するい〻、摸擬の尤も完全なるものなり。小兒い〻母の音聲擧動及び歩行等の末に至るまで、驚くべく又殆んど笑ふべき程完全に之れを再演す。而して摸擬の斯くも完全なるの理由如何是れ或い〻小兒が其の母を見るの機會夥多なるによるならん。又或い〻小兒の觀察微細なるによるならん。然れども、他に尙ほ理由ありて存するい〻、何人も知る所なり。母い〻小兒の内に在り。其の生るゝや、之れに傳ふるに、其の天性を以てす。而して摸擬の斯くも完全なるもの〻、此の不可思議なる感化力小兒の内に活動すればなり。之れと等しく我等い〻己れ以外に基督を見ると尙ほ畫工の粉本に於けるが如くにして、細かに基督の性質を寫す

を得べし。我等ハ又一歩を進め、祈りをなし、聖書を讀み、日々に彼れと交ハり、其の感化を受くるを得べし。然れども若し彼れを摸擬すると深く且つ全からんと欲せば、更に他ヨ必要なるものあり。即ち母の猶ほその小兒の内にある如く、基督も亦我等を生むヨ當りて其の性質を傳へ、以て、我等の内にあらざるべからず

四

然れども『基督の摸擬』の欠點ハ以上擧げし者よりも、一層深く今日の讀者の感し居るものなり。即ち今日の人が各種の研究をなすヨ獨りその嚮導と頼める歴史的の意味是れなり。基督の精神ハ本書を貫き、全篇大抵は主の聖言の尤も價値ある註解となして差支なき主の教訓の要領に充てりと雖、基督の歴史的肖像ヨ至りてハ、一も明ならず。然れども、基督の歴史的肖像ハ、完全なる摸擬をなすヨ一つのなくてならぬものなり。我等若し基督ヨ似んと欲せば其の人物如何を知らざるへからず。書工若し只漠然たる概念力を有するのみよてハ、一の像も之を完全に寫し取ると能ハず。今ヱ、ケンピの著書中ヨは精密なる基督の肖像なしと雖、彼れの爲めにハ、基督は所有る秀美なる事の合體又總額なり。而して彼れハ已れの理想の秀美ヨ基きて基督を構成したりしも傳記を尋ね、其の中より彩色を得て畫を描くが如きとなかりしなり。彼れハ特ヨ救世主の歴史中の或る大部面を摘み、譬へば、彼れハ自ら謙り て人となりたれば、我等も謙遜ならざるべからず。彼れハ苦しみて世を送り給ひたれば、我等も亦喜んで苦しまさるべからずといふが如き說をなしたれども、未だ曾て其の筆鉾を此の種の大体論の外ヨ及ぼしたるとあらず。

夫れ四福音書に基づきてヱ、ケンピよりも完全なる活畫を描き出すハ、必ずしもなし得ざるとヨ非ず。殊に當今の如く容易なるハ未だ曾てあらざる所なり。當世紀ハ是れ基督の詳細なる歴史に其の意を注ぎたる

第一着として長く基督教の思想史より紀念せらるべきものなり。近頃此の問題に關して著述せられし諸書い其の數夥しく、且つ大に人心に影響を及ぼせり。基督の此の世に生存せし狀況い、不撓の忍耐を以て之を吟味し、東西の知識を集めて之を解明し、所有る出來事充分に明白となれり、而して今や古人の審にし難しとせる部面に進入し、すべての生況――家族、國家、教會、祈りの生涯、朋友の生涯等――に引き合はして主の跡を追ひ、且つ主い如何に自ら處し玉ひしかを細かに窺ふを得ることゝなれり。是れ當世紀の特權たる主を知るの方法なり。而して單に已れの理想に依賴して漫然基督の聖德を描き出さんとするい是れ足其の戸外に出でずして已れの工場に靜座し山川原野に關する概念力を以て風景を寫す畫工と異なることなきなり。

研究の方法い極めて大切なるものなり。或は之れを貴重して其の實に過ぐるが如きい大なる誤謬なり。蓋し其の方法の背後に活動せる心意情緒い更に大切なるものあればなり。夫れエ、ケンピの著書に存する燃ゆるが如き愛心、最と高き敬虔、及び思想の聯絡とその嚴肅なることい精密と眞實とを以て其の主人公を現はし、同情の念ある讀者をして常に神聖なる熱心を濺がしめ、信仰を强からしむ。然れども改進せる研究法の利益も亦尠少に非るなり。我等信仰冷淡となり、思想の羽翼他人に比して微弱となりしを感ずる時い、何によりても已れの信仰の助けとなるものい、皆之を採用すべし。夫れ基督を摸擬する事の如きい、我等の絶えず熟考すべき問題なり。蓋し歷史の進化と知識の開發とい、人をして此の問題に關する新地位に移らしむればなり。即ち時代の變遷に隨ふて各、其の見解を異にし、最終の判決を下せしと未だ曾て之れあらず。之れを歷史的に研究するとい經濟法律等百科の學に勝りて近代の人心に浸染せる思想の習慣に適合するものなり。さりとて信仰と愛を欠く時い成功し難かるべしと雖、之れを用ふるい教會に許可せられたる特權

にして、之れを用ふる時ハ神もその恩惠を與へ玉ふべし。

五

今日まで此の問題を研究するの精神ハ、彼の福音的學者の間ニ熾んなりしといふ能ハざるも、福音的情意ハ勿論之れを求めしニ相違なし。余ハ時々謂へらく、エ、ケ、ジ、の著書が其の廣く行ハるゝニ、ハ題名も亦興かりて尠からざる功あるなりと。抑も基督の摸擬なる語は、凡そ基督信者たるものゝ肺肝ニ徹し、幾多の動機を靈魂に與へ、又其書を繙けば天の高きニ上れと命ずる聲あるニ似たり。是れ實ニ我等が靈魂の尤も聖き時間ニ於ける至深の願望を悉皆集めたる總額ニてあるなり、されど信者の經驗ニよりすれば、基督を摸擬するの貴きことは言語ニ絶すれども、說教及び基督教文學に於てハ、未だ必らずしも然らざるが如し。前世紀ニ於て、蘇國の宗教を滅絶せしめんとせし中庸說ハ基督の摸範を偏重して、その贖ひを棄て、過去の罪を救ふものとして之れを示さず、

專ら之れが摸範ニ倣ハしめんとはかしたり。福音的基督教ハ之れと異なり基督の贖ひを以て宣教の骨髓となし基督の死ハ其の摸範ニも增して大切なることとなす。此くの如くニして眞理は兩分せられ一派の論者ハ基督の摸範を以てその要旨となし、一派ハ贖ひの死を以て其の第一義となす。ユニテリアン教がチャンニングの德望と辨才によりて一時世界の勢力たらんとする勢ありたるハ首として基督の高潔仁義を頌揚したるが爲めなり。福音的基督教會ニ在りてハ聖書に基づきて基督の神性を說きしが、是れ尤も堅固なる論理法なれども、其の方法宜しきを得ざるより、人の嗜好ニ適當せず、斯くて又二派を生じ、一は基督の人性を說くを本領とし一ハ其の神性を主張することとなれり。

今日ハ斯る分離を攻擊すべき時なり。此の兩個の半面の眞理ハ、共に我等の所有ニして取りて一体となさゝるへからず。基督の死ハ我等の物なり我等が今も後も神に容れらるゝものなりとの希望の根據此にあ

りされど是れ我等の起首よりして、未だ結尾よりに非ず。我等は進んで基督の死より生に及び、彼れが世を贖はんが爲めに生れし愛もて、我等の生命を發生せしめざるべからず。之れと等しく我等基督の神性を主張すると共に其の人性の感化力と摸範とを奪ひ去らんとするものを見て、力を盡して之れと爭はざるべからず。蓋し其の人性の完全なることと、その完全なるが爲めに基督が自ら已れに就て明言せるところに確實なりといふことを知ることの二つに、共に彼れが人間以上の者なりとの信仰を藏むる鐵壁なればなり。

第二章　一　家庭に於ける基督

馬太傳八章十四、十五
同　九章十八―廿六
同　十七章十八
同　十八章一―六
同　十九章十三―十五
馬可傳五章十八、十九
同　十二章十八―廿五
路加傳七章十一―十五
同　十一章廿七、廿八
約翰傳八章一―十一
同　十九章廿五―廿七
馬太傳十二章四十六―五十
路加傳九章五十七―六十二

馬太傳一章
同　二章
路加傳一章廿六―五十六
同　二章
同　三章廿三―廿八
馬太傳十三章五十五―五十八
路加傳四章十六、二十二
約翰傳六章四十二
馬可傳三章二十一
約翰傳七章三―九

第二章　家庭ニ於ける基督

一

家族の制度い人生ニ於ける必然の要素及び自由の要素と稱するものゝ尤も著明なる實例を示すものとす。

家族ニハ必然といふ不思議なる要素あり。人各皆特別なる家族ニ生れ其の家ニハ己れの生れざる先きに己ニ成りたる歴史と家風あるものあり。されば已れい如何ニするも此の鐵鎖を脱すること能はず、却て之れニ感化せられて他日著しく其の特風を顯すに至る。其の家い或い名門顯家なることあり。或い布衣貧賤なることあり。或は生れて人ニ羨まるゝ程の戸主となるもあるべく。或い遺傳の惡疾と負債とを受け繼ぐもあるべし。人の生るゝや、父母兄弟姉妹叔姪を撰擇するの權利なし。而して此の解くべからざる鐵鎖の下ニありて、一生の禍福四分の三まで其

の支配を受く。

一夜戸を敲くものあり。聲と應じて之れを開けば、未だ一面識だもなき人なり。彼れの利害痛痒我れに於て何かあらん。彼我の交際眞と吳越のみ。然るに其の人若し口を開て「我れい子と血肉の同胞なり」と云はゞ今までい千里の隔絶ありし者も瞬時に一躍して親近、間髮を容れざる者となり、絶つべからざるの線い彼我の間を接續すべし。此の線い我が榮譽の粧飾となることもあるべく、我が利名を傷ふこともあるべし。之れを稱して、家族制度中必然の要素と云ふ。

基督も世に降生したまひしからは、此の必然の要素を具へ給はざると能はず。基督は母ありて生れ、生れて由緒ある家族の一人となり、兄弟と姉妹とを有し給へり。

是等の狀態い基督の爲めに未だ全く影響を及ぼすことなかりしといいふべからず。母の感化いいふまでもなく著明なるべきことにて其の少時の有樣を詳細に査察するを得ば、必ず得る所あるべし。今其の一例を擧げばマリヤがエリザベツに遇ひし時謳ひし歌い、滿腔の感情を吐露せし者にて、孕兒に其の感化を及ぼし、耶蘇の說教幾たびか之れが反響あるを示せり。思ふに父母の感化のみを以て、基督を論ずるい勿論當を得たるものにあらずといへども、其の額上には父母より受けたる特性の形象、歷然として存し、身を終るまで滅せず、動作の間に之れを顯せしも又掩ふべからざるの事實なり。其の他基督い又ダビデの遠孫として生れたまひたれば、其の邊の影響もなしといいふべからず。人若し其の家貴ければ、其行ひ自ら氣高し。ミルトンい樂園再得の中に於て、此の事を叙し、年若き救主の其の祖先を思ふて、高尙なる志を作興せし有樣を述べて云く。

羅馬の人に打ち勝ちて、イスラエル人を救ひなん。そのゝち天下を征服し、おごれるものゝ跡を絕ち、世を泰平に治むべし。

兎ゝ角基督が「メサヤ」の事業を行ふに至れるものゝ、其の王統の後裔たりとの事實に由りて導かれし所尠からざるゝ、何人も之を信ずるに躊躇せざるべし。

其の他基督ゝ、其の必然の要素の支配を受けざると能はざりし事實を擧げんゝ、耶蘇ゝ其の父母の貧賤なりしが爲めゝ、世の賤しむる所となれり。基督の遠祖ゝ貴かりしことゝ勿論なりといへども、其の近親ゝ貧しかりき。此を以て初めて世に出てし時、世人ゝ之を賤しみ嘲けり、是れ大工の子ゝあらずやといふ者ありき。嗚呼、世ゝ實に基督を知らざりき。而して是も亦基督が後世ゝ垂れ給ひし遺訓なるに似たり。何ぞや、云く、人若し神に事へて忠實に、自ら持すると高尚ならば、其の父母ゝ貧しく、其の家ゝ賤しくとも、終ゝ世の人の口を噤して嘲弄の語を放つ能はざらしめ却て畏敬愛慕の念を起さしむることゝ是れあり。

人生自由の要素も亦之れと等しく著るしき影響あるものゝして、其の不可思議なるとも相讓るとなし。人生れて年已ゝ長ずれば、已れの意に隨つて妻を求め新に一家を建つ。此の新家族の中にありてゝ、已れの言行著るしく他を感化し、子孫をして隱然其の風を因襲せしむ。

基督ゝ妻を娶らず家族を作らるとなかりき。人或ゝ之れが爲めゝ基督の龜鑑完全ならずと稱し、人生の中尤も神聖なる一事ゝ於て摸範を欠けるとゝ頗る遺憾のことゝなす、是れ甚だ無理なる論なり。然れども此の大倫ゝ關する教訓ゝ直ちゝ其の摸範によりて之れを推知するを得べし。左の一節ゝ是れ婚姻ゝ關する尤も深遠にして且つ嚴肅なる論なり。曰く、

夫なる者よ、キリストの教會を愛し其爲めゝ已を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし。かれ已れを捨しゝ水の洗を以て道に因て教會を潔め、之を聖なる者とせんが爲なり。また點汚なく、皺なく、凡て此の如き類なく、聖ゝして瑕なき榮なる教會を自ら已の前に建ん爲なり（以弗所書五章

廿五節)。

二

耶蘇は生涯の間家族の制度を榮あるものとなし玉へり。

當時パレステナには、家族の間に種々の恥づべき風習流行せり。其の一二を擧げんに、離婚甚だ盛にして、針小の故障も倘ほ之れが理由となすを得、又コルバンの法によりて、人の子たるもの其の雙親に對して奉養の道を欠くことあるも、聖殿に物を献ずれば以て之れを償ふに足るとなせり。耶蘇は是等の惡弊を見て赫然怒りを發し、婚姻の忽がせにすべからざることを攻擊し、言若しくは行ひに聽りて、此の道德界の基礎を覆さんとする者は、宜しく余の說を聽くべし。余若し其の人に對して道理を悟らしむる能はざれば、余は之れと關係を絶つべし。婚姻は文明の起點にして、又項點なり、醜人も之れを爲め溫和となり、高等の教育ある人も、其の溫和なる表はすには之れに婚姻は之れに過ぎたる方法なかるべし。婚姻は解き離ずべき者にあらず、蓋し婚姻は之れより生ずる不幸の比較すべくもあらぬ程なり、一般の幸福を助くれば增して、己れの煩ひを起すにも增しなり。……夫れ或は男、或は女が相互ひに各自の煩ひを惹き起すにも增して、己れの煩ひを起すものは、眞心なれば、眞心と婚姻とすることなかるべきか(Blackie, The Wisdom of Goethe)又一たび結びし赤繩は千

代迄も渝る可からざることを律て給へり。

基督の幼兒を愛し玉ひしと、及び之れに付て宣ひたる聖言は、父母の其の子女に對する愛心を一層熾んに且つ潔からしめ玉へり。思ふに異端の徒といへども、已が子を愛せざるはあらず。されど其の愛の無下に陋しくして、多くは動物的の傾きあるとは、基督教徒の家庭に比すべくもあらず。基督は他の在弱にして世の輕蔑を受けたる者に於ける如く、大いに幼兒の價値を高からしめ給へり。凡そ廊下を走せ回はる小やかなる足音、あどけなく打語らふ細き聲音は、誰人の耳にも樂しく聞こえ、小さき指もて我が肩を壓し、小さき唇もて我が頰に接吻せらるゝ時、深く神の恩を感じ、祈禱の念を以て胸躍るが如く覺ふるものは、首として基督の賜なりと謂はざるべからず。基督云く、幼兒の我に來るを許せと。彼れは家庭を變じて教會となし父母を移して牧師の地位に置き給へり。而して斯の一種の制度によりて多くの弟子を得しこと、敢て教會に讓

らざるべし、思ふと母の語り聞かする耶蘇の話し、父の日々と示せる摸範い雄辯なる說敎、謹嚴なる禮拜と其の功を一とするあらん。古來基督敎が敎會の腐敗の爲め僅かと家庭の間に隱、避所を求めしとい、第一兩回のみならず。又基督敎國の大敎師と呼ばるゝものとして、其の家庭に篤き信仰を養はれざるもの甚だ稀れなり。家庭の神の道と於ける其の關係豈疎しとせんや。

耶蘇の奇蹟を見ると其の多くい家族の愛情と激發せられたるものあるが如し。ヤイロの娘を蘇らせナインの嫠の子を起させ、ラザロをして再び暖かる團欒の樂しみを得せしめたるが如き、基督にも亦家族相愛の經驗あくんばあらずと思はるゝなり。彼の放蕩息子の譬喩の如きい、基督が微妙の人情と淺からざる血肉の愛心を有し玉ふとあらざるとりい、焉んぞ彼れの如く至妙精細あるを得んや。

而して基督が家族制度と重きを置き玉ひしとい、備さと已れが家庭と於てあせる擧動とよりて徵せらる。其のマリヤの膝下とありし生況い今多くい知るべからずといへども、子として完全なりしものなるとい、記錄のはし〳〵と其の證を殘し居るあり。

父母として其の子の智慧、道德、氣品の發達を見んことい、何の喜ひか之れと過ぐべき。路加い云くイエス智慧も齡も彌增り、神と人とと益々愛せられたりと。ヨセフとマリヤの胸中知るべきのみ。基督若し當時已と已れの鳳雛として他日高飛するものあるを知ることありとするも斷じて父母と從順の德を欽き給はざりしあらん。蓋し其の十二歲の頃に於てすら、父母と從ふてナザレと至り、之れと奉事したりと云へばなり。世人の一般と想像する處によれば、此後問もなくヨセフい他界の人となり、耶蘇い一家の長として生計を負擔し玉へり。是れ素とより確實ならずと雖、基督が其の最期と當りて母と對する愛情の甚だ深かりしとい、此の福音書と見へざる當時の生況を窺はしむると足るものといふ

べし。彼れ十字架に掛り、其の母を見て之れと語り給へり。彼れゝ今四苦八苦の境に臨み五臓六腑湧き返るの地にありて之れをおせり。彼れゝ今既に玉の緒絶えんと欲し靈魂を唯天の父に通ゝするの時に於て之れをなせり。而して之れをなす何ぞ其の深切なるや。彼れは母の將來を氣遣ひ、已れの弟子中にありても、無謀あるペテロを取らず、陰鬱なるトマスを採らず、約翰を撰んで母の行末を托し給ひたる其の注意の行き届けるを見るべし。

三

子の從順に於ける父母の權ゝ神聖なりといへども、是れに條件のあるあり、凡そ父母としては其の子の獨立心を養ふこと素より其の任なり。學校の教師としてゝ其の學生を育つるの目的、只他日世に出でゝ人間の生活をなすに差支なからしむるにあるが如く、父母も亦、已れの命令ゝ何時までも權力あるものにあらずして、已に其の極點を超ふる時ゝ、之れに服從するとせざるとゝ、子たるものゝ意に任ずべきとなるを承認せざるべからず。愛ゝ流はるとなく、敬も廢すべからずと雖、權利にゝ廢るべきときあるあり。然らば何れの時か所謂る其の極點なるかといふに、是れ一の難問なり。蓋し何れの場合に於ても一定し居るにゝあらずして、事毎に臨機の處置あるべきものなればなり。されど子として此の自由を得ると余りに早きに過ぐれば、却て其の身の禍となるべく少年の之れが爲めに生涯を誤まりしもの少からず。父母として其の子の監督に任ずるものゝ、心すべきとなり。されど父母に於ても亦時として子に對する權利を保つと餘りに久しきに過ぐるの過ちに陷ることなしとせず。父たる者が其の子の婚姻して別戸を立つるを善しと認承し乍ら、尚ほ之れを已れと同居せしめ、母たるもの其の意に任かし置けば一層善かるべきに反りて有夫の女の家事に干渉するが如き是れあり（小供の義務は其の親に從順なるにあり。されど男若しくは女の義務は其の親に從順なるにあり。されど、聖書にも見えず。亦其の他の諸聖賢の

書にもあるこなし。小供が已に成人せる男若しくは女なるべし。人生の常なり。而して時換はるに従ひ、世々の人々皆その時代に特有なる困難を解釋するの任あるなり（Ruskin, Morning in Florence, vol.III. p.72）

耶蘇の母マリヤの此の點に於て過失をなしたり。マリヤの幾たびか、其の行爲に干渉し已に公然の傳道に従事せし時にも、尚ほ此の癖を絶たざりき。ガリラヤのカナに於て婚姻の席上耶蘇を以て自ら誇りしが如き、又屢其の健康に付て自ら懊惱せしが如き皆是れなり。されど不當の干渉をおして其の行爲を制限せんと試みしものの、素とより獨りマリヤのみならざるなり。彼の温良なる基督の怒りを發せしむる程の事あるこなし。小供が已に成人せる男若しくは女なるべし。人生の常なり。而して時換はるに従ひ、世々の人々皆その時代に特有なる困難を解釋するの任あるなり（Ruskin, Morning in Florence, vol.III. p.72）

耶蘇の母マリヤの此の點に於て過失をなしたり。マリヤの幾たびか、其の行爲に干渉し已に公然の傳道に従事せし時にも、尚ほ此の癖を絶たざりき。ガリラヤのカナに於て婚姻の席上耶蘇を以て自ら誇りしが如き、又屢其の健康に付て自ら懊惱せしが如き皆是れなり。されど不當の干渉をおして其の行爲を制限せんと試みしものの、素とより獨りマリヤのみならざるなり。彼の温良なる基督の怒りを發せしむる程の事ありとせんか、干渉は即ち其の一なりとす。即ち耶蘇曾て彼得を顧みて『サタンよ我が後に退け』と宣ひしも之がためなり。又其の母に對して粗暴の風ありしとも稀れなりとせず。思ふに基督の親戚朋友に對して愛情甚だ篤く其の願望及び愁訴の基督の胸を痛ましむる種となれり。是れ蓋し基督の出來る丈け彼等を喜ばさんとしたればなり。左れど斯くて已れの天職に背馳するに至るの恐れなしとせざれば、誘惑に抵抗せんとて怒りを發し給ひしとさへありしなり。

耶蘇の母とその兄弟一日之れに遇はんとて來れり。此時の如く耶蘇の行に粗暴の樣ありしとの他にあるべしとも見えず。耶蘇此事を已れに傳へし人に向ひ『わが母、わが兄弟の誰ぞや』といひ、又側に座する人々を環視して曰けるの『わが母わが兄弟を見よ。それ神の旨に從ふ者の是わが兄弟わが姉妹わが母なり』と。是等の語の粗暴の氣を含まずとは謂ひ難しされどあられもなき亂臣賊子の妄言と同一視すべからざるの、

前後の有様を考へなば明かあらん。馬可ハ之れを記して云く『その親族きゝて彼ハ狂氣せりと言て之を拏んとて來る』と、當時耶蘇ハ傳道事業の爲めゝ專ら其の精神を籠め寢食も忘るゝばかりゝてありしを以て、親族の者等ハ餘りの事ゝ精神も惑亂したるならんと推測し、捕へ歸りて適當の療治を施すこと、是れ已れ等の正ゝ爲すべき義務なるべしと思ひたりき。若し夫れマリヤも亦此の妄想を抱き、不遜の擧動あるゝ至りたるの一人ならしめば、耶蘇の之れゝ接する彼れの如くなりしとは、殆んど怪むゝ足るものあし兎ゝ角マリヤハ已れ至りて訪問ひたらんゝ何事をも打ち捨てゝ其の來意を尋ねざるとのあるべきと考へたりしなり。されど耶蘇ハ却て之れを機會としてマリヤに敎ふるゝ區々たる家事よりも尙ほ大切なる任命已れゝありて神の事をなすにハ、神の外に已れを左右するものなきを以てせり。父母の權といへども、決して侵入すべからざる範圍あり。名けて良心と

いふ。耶蘇ハ獨り自ら之れを守りて其の神聖を保ち給へるのみあらず。又其の門徒にも此の心掛あるべきことを命じ給へり。耶蘇ハ早晩家族の分裂の発るべからざるを遠察し肉に拘泥して靈を忘るゝものを警しめて云く『地ゝ泰平を出さん爲ゝ我來れりと意なかれ泰平を出さんとゝ非ず刀を出さん爲に來れり夫わが來るハ人を其父ゝ背かせ女を其母に背かせ媳を其姑に背かせん爲なり人の敵ハ其家の者なるべし』と是れ蓋し耶蘇の自ら快しとし玉ふ處ゝ非ずと雖又決して姑息因循に流れざりし者ハ、家族の事ゝも優りて一層重きを置くべきとのあればあり。されば之れ其語を次ぎて我よりも父母を愛む者ハ我ゝ協ざる者あり『我よりも子女を愛む者ハ我に協ざる者なり』といひ玉ひたるなれ。此の刀今ゝ至りて尙ほ銳どく、印度のごとく家族制度の過嚴ゝして基督の敎を知らざる國民に斯道を傳ふる時ゝは、往々家族の調和を破り同胞の心中に不安の念を抱かしむるの止むを得ざるゝ至ることあり。所

謂基督教國と稱せらるゝ處とて、すら父母の世俗に溺るゝと深きが爲めに痛く、其子の宗教と入るを嫌ひ十字架を負はんとする者をして躊躇殆んどなすところを知らざるに至らしむることあり。斯る場合とわりては充分と基督信者たるの智慧と忍耐とを要すること極めて必要なりといへども、爭點の結局明白にして、二者其の一に居るを必要とする場合と於てゝ人よりゝ寧ろ神と從ふを以て我等の義務なりとす此の問題と付てはマーテンセン頗る大切なる注意を呼び起せり(Mortensen, Christian Ethics, vol. II)曰く、何れとも決し難き困難なる場合に際するとあるも、又家族中の或人々、基督教の眞理を了解し居り乍ら、尚ほ之れを外と發表するに至らず、其の行爲は曖昧にして時々我れを待遇するの道を誤まるとあるも、通常俗臭的なる家族は、福音の爲めに混雜を惹き起すとあるは是れ怪しむべきことにはあらずして、寧ろ上帝の經濟法と符合せるものにてあるなり。世若し之れと反對の境遇に處して、全く基督を信じ深く罪を悔ゆるとの家族一般と無限の喜悅を與ふることを得るものゝ、豈感謝せずして可ならんや。

四

諺に云く『何れの家にも、其の膳架に骸骨のあらざるゝなし』と。其の意味ゝ外面如何に琴瑟相和して、團欒の樂しみ何時までも盡きじと見ゆる家にても、其の內部にゝ日光を遮ぎる軋轢の如き、恐怖の如き、秘密の如きものあるべしといふにあり。

勿論我等も此の諺に漏れたる幸福なる例外の家族あることを認承す。されど如何と樂しき家庭なればとて、一も風波の起ることなくてあらるべき。親しみてゝ狎れざらんと萬人の難しとする所、些々たる事の行違ひより反目疾視の不幸も生せずとゝ云ふべからず。希くゝ家族相互ひと其の過ちを恕し、他人の侮りを禦ぐと注意せよ。

耶蘇も亦此の數にゝ漏れ給ふことと能はずして、其の一家特有の悲しみを受け玉へり。即ち其の兄弟が之れを信せざりしことなり、彼等謂へらく耶蘇も亦己等と共に生長せしものなると、獨り彼れのみ勝れし者なりとゝ如何にも其の意を得難しと、之れに加ふるに耶蘇の名譽の日に

〳〵彌増り行くを嫉ましく思ひたりしが、彼等が基督のとゝ關渉する時ゝ、常ゝ之れを惱ますのみにてありき。

讀者諸君ゝして耶蘇と同一の境遇ゝある人々ゝ、此の際に於ける悲しみの如何に胸苦しき事あるやを承知し給ふあるべし。抑も神の聖徒と呼ばるゝ者にして、神を敬せず、名利の慾に溺るゝ家族の間に生活し、獨り己れの信仰の鍛錬を受けしと、古來其例甚だ乏しからず、家族の迫害ゝ世人の迫害を公けに受る場合とゝ異ゝして同情を表し呉るゝ人、左まで多からねば其の苦しみゝ一人ならん。されど此の種類に屬する苦痛の經驗尤も深かりし基督ゝ、常ゝ之れと同感の情を懷きたるべきを忘るゝとなかれ。其の言に云く、豫言者ゝ其故土その家の外ゝ於て尊まれざるとなしと。彼れの同情ゝ永遠に渝るとなかるべし。

耶蘇ゝ其の兄弟の不信ゝ對して如何ゝ擧動ひ給ひしか。彼れの大なることを論證辯析し玉ひしか。又ゝ自ら之れを悟るの日まで緘默し給ひしが、今之れを致ふるゝ由なしされど耶蘇ゝ彼等の爲めゝ絶えず祈り、遂に喜ばしき結果を得給ひしとゝ少しも疑ひを容れず。

耶蘇の兄弟は久しく其の不信を改めず。延て其の最期ゝまで及べるが如し。されど使徒行傳の初めゝゝ、最早全く其の舊套を蟬脱し、エルサレムに使徒と共ゝ信徒となりて會合せり。思ふゝ當時耶蘇の門徒あるものゝ其の信仰最低の干潮ゝあり。朕離散逃殆んど收拾し難からんとす。而して耶蘇の名譽の最高點にありし時すら容易に信を置かざりし者の今ゝ信者の數ゝ加はり來りしゝ非常の事とせざるを得ざるべし。

此の解説を聖書ゝ求むるゝ使徒保羅ゝ其の哥林多前書に於て耶蘇復活の後ち種々の人々ゝ現はれ給ひしとを列擧し『ヤコブに現はる』と云へり。此のヤコブは確かゝ主の兄弟なるべし。若し然らんゝは耶蘇が復活後ゝ初めてなせる行爲の一ゝ即ち扶くべからざる確證もて、其の兄弟の不信の堅城を打破し給ひしとありとの事實を極めて明かゝする

ものあるよわらずや。思ふにヤコブハマリヤの家族よ己れの實驗を傳へ聞かせしなるべく、斯くてユダも亦相踵で信者となり、二人ともに聖書の筆者中よ數へらるゝ身となりたり。

余ハ敢て云はんとす。耶蘇の兄弟等が斯る時機に臨みて信者の中に數へらるゝよ至りしハ是れ亦復活の眞實なるに一の確證を加へたるものなりと。而して亦之と同時に基督が忍耐以て同胞の救ひの爲めよ盡くし、我等に骨肉の未だ救はれざる者の爲めよ祈り、望み、務むるの例を遺し給ひしものなりと考へざるべからず。

第三章　國家に於ける基督

馬太傳九章一節
同　十三章五十四節
同　十七章廿四—廿七
同　二十章十七—十九
同　二十三章三十七—三十九
同　二十六章三十二
路加傳四章十六—三十
同　十三章十六、廿四、廿五
同　十九章九
馬太傳二章
同　四章三—十
同　九章九、廿七
同　廿一章一—十一
同　廿二章十五—廿一
同　廿六章四十七—六十八
同　廿七章
路加傳二章十一、廿九、廿二、廿八
同　十三章廿一—廿三
同　廿三章七—十二
約翰傳六章十五
同　十一章四十八
馬太傳十八章一—三
同　十九章廿八
同　二十章廿—廿八
約翰傳十八章廿六、廿七
同　十九章十四、十九、二十

第三章

國家に於ける基督

一

當代に於ける通常基督信者の思想中には、國家といふ觀念、蓋し其の要部を占め居らざるべし。其の義務の中にても、己れが國家の一民として負へるものよりは、尙ほ大切なるもの許多あるならん。第一には人とは何ぞや、靈性とは如何なるものかといふと。第二には己れが一人の教會員として盡くすべき義務如何といふと。第三には子若しくは夫、若しくは父として如何に行ふべきかといふと等にして、國家の一民として己れは如何にすべやといふが如きは、思ふに第四位の問題なるべし。

是れ或は至當の順序ならん。又恐らくは基督信者としての道にてもあるべし。されど古への世の見解とは全く正反對なり。例へば希臘の大賢等は國家を以て個人家庭教會の前に置き、己れに關する最要の疑問は

國家の一民たるものゝ義務如何といふことなりき。彼等は信ずらく人生の目的は國家を強大にするゝあり、國家の爲めゝは一切を捐てゝ之れが犧牲ゝ供せざるべからずと。故ゝ一身の修まると修まらざると、一家の齊ふと齊はざるとゝ彼等の先づ問ふ所ゝあらずして、國家の汚隆を其の緊要の問題とゝしたりき。

耶蘇は此の順序を轉倒し玉へり。耶蘇は所謂箇人主義の發見者ゝして人々全世界よりも貴ふとき靈魂を有てることゝ、世の生産物中尤も優れたるゝ、高潔の性質なることゝを敎へ給へり。要するに國家強ければ、箇人の如きゝ問はずして可ありとは、穩當の說ゝあらざるべし。國家、敎會、家族は箇人を利するの手段に過ぎず。國家、敎會、家族の標的ゝ之れより生ずる箇人なりとは基督敎の眞理なり。宗敎にもせよ、政治にもせよ、其の團体の標的は敎育組成する人ゝあり（Amiel's Journal, Vol. I）されば基督敎は此點ゝ於て、彼是の地位を換へ、上なるを下とし、初めを終りゝ、後なるを前に置きたるものなり。

國家といふ觀念に付てゝ、以上の如くに基督敎の說く所異敎徒の哲學と相容れずといへども基督敎ゝ重きを國家に置かずといふは、大なる妄說なり。基督敎の第一の目的ゝ善人を作るにあれども、其の善人ゝ須らく善き國民ならざるべからず。

二

祖國を愛し、見慣れたる景色を愛し、鄉里を愛するとは人情の常なり。此の常情を、以て人類の進歩と、世界の開明とに利用するとゝ、神の意匠の一部分なり。凡そ一町村の民としてゝ、其の町村の幸福を進め之れをして美ゝ益美ならしむるの義務を有す。一大偉績を立てゝ鄉國の名譽を興さんとの心掛ゝ人類たるものゝ尤も愛すべき情なるべし。

或る邦國ゝ此の感情を作興し、其の子孫をして愛國の義務を負擔せしむるにおいて一種の特有力を現ゝせり。パレスチナゝ其の一ゝあり。思ふに其の一般に愛國心に富みたるゝ、一は山河の美なるゝ依り、一ゝ國境

の小なるに依るべし(高地の河流巖石の處を通る時に瀧となる如く狹少の區域に限られたる感情い、一處に專らとなりて激勵奔騰すべし)といへども何れの國にありても、首として此の情の原動力とあるものは其の土地に住ひし犧牲獻身的の大豪傑其のものあるが如くパレスチナにありてい、其の歴史の紙面に非凡の人名多きことは、之れが大原因たらずんばあらず。ノヴァリス云く佛王中の明君は其の臣民をして殘らず日曜日の午餐に燒鳥を食ふに至らしむるを目的とせり。其の志は甚だ好し。されど下民は粗食を取りながら、斯る國に生れたりとて神に感謝する如き政府の下にあるを以て燒鳥を食ふ國に優るべしなす。

耶蘇も亦之れに激勵せられたる一人なり。夫れ人、基督の傳記を讀み、其のガリラヤの野より蒐めたる天地の美の肖像たる彼れの言を見てい、爭でか基督が是等の景色を樂しみ愛せしに非ずといふを得んや。基督が生長せしナザレい一寒村に過ぎざれども、其の名い遂に人々の記憶より取り去るに由なく彼れい今日も尙ほナザレの耶蘇あり。基督い日曜日に婦女を療するに當り此の婦人も亦アブラハムの娘ありといふを理由として異議を防ぎ、又稅吏や罪ある人を愛するはイスラエルの家の迷へる羊あるが爲めとせり。國都エルサレムは猶太人の心に大磐石の如く横はりシヲンの山は國歌の骨髓にてありき。而して耶蘇の之れを思ふの深き一際目立ちて見ゆ。曾て呼んで云く『噫、エルサレムよエルサレムよ母鷄の雛を翼の下に集る如く我あんぢの赤子を集んとせしこと幾次ぞや』と、此の感情は死後に至りても尙ほ絶ふることなく、其の復活し給ひし時傳道の方針を弟子より敎へし言よもエルサレムより初まり云々といへり。彼れは其の國より興りし大豪傑と其の遺業より對しては、極めて親密なる同情を表しアブラハム、モーセ、ダビデ、イザヤ等の名は屢其の口頭に上り彼等の成功未だ全からざるものあれば即ち自ら之れが勞を執りて完成より至らしめ給へり。是等こそ眞實の愛國心といふべきあれ。されば若し身を殺し、節に死したる仁人義士多き國は幸ある

國といふべし。是等英雄の言行い、聖書に亞で精神の滋養となるものにして後進の士たるものゝ、能く先人の下せし種子に培ひ、其の遺業を大成せんとの志を起すなるべし。

三

基督の尙は世と在ませし頃と愛國の心腸あるものゝ、國家と對して默止するを得ざる一の義務あり。當時パレステナは憐れにも附庸の一國として國民は二重の壓制と呻吟したりしなり、即ち一には無情のヘロデ王ありて（大祖ヘロデ大王は人なりしが、猶太の公主に婚して國民の感情を和げんとなしたり。）此の一國中の數州を支配し、一には羅馬の皇帝全土の管轉權を掌握したればなり。

此の二重の羈權を除き再びパレステナをして獨立の國家たらしめ尙ほ進んで覇權を列國のうちに執るの地位と達せしむることは、基督の義務とはあらざりし乎、救世の英雄を歡迎し國家の爲めに身命をも惜まざること至るは、當時の人情とてありき。パリサイの徒は一体と愛國の感念を抱きたりし者とて、其の一派の如きは犧牲の精神と、勇敢の氣力を以て、何事とも當らんとするよりゼロテの名を負ふに至れり（此の派の一員シモンゼロテは耶蘇の弟子となれり）

耶蘇は正に此の任と當るの命を受けたる者と似たり。彼れはダビテの子孫として王統の後裔たり、其の生るゝや博士東より來りてエルサレムと之れを求め、ユダヤの王として生れ給へる者は何處と在す乎と云ひ、初めて門徒となりし者の一人ナタナエルは、耶蘇に接見せし時之れを祝して「イスラエルの王と云へり。耶蘇の凱歌をエルサレム城と奏し給ひし時とも人々又之れと同名稱を以てたゝへ奉りしが其の意蓋し耶蘇の實際と斯國の王たらんことを希望したりしなり。要すると聖書の上と見ゆる種々の出來事を考へ合す時は、耶蘇の天職は單に一私人たるに止まらずして、國家を救ひ、之れに首領たるべきと疑ひなきに似たり。

而して之れを實踐するに至らざりしは如何。是れ頗る難問にして、福音書を熟讀するものゝ常に疑ふ點なれども、事頗る秘義に屬す。彼れは其の鄉國の王たらんとせし乎。サタンが之れにすべての王國と其の光榮とを示せしは其の少時に夢想せし所を誘き出さんが爲めなりし乎。若し夫れ猶太人民にして雙手を擧げて之れを歡待したらんには、如何なる結果に至りたるべき乎。鼎をエルサレムに居き、笏を執りて宇内に君臨し給ふべき乎。其の天職の意義を變じ此の世の外の王國こそ我れの國なれとて其面を回へし給ひしは、已に此の國を統御するの望全く絶え果てたるの時なりしか。

基督の傳記を讀む者として、斯る疑ひを其の心に抱かざらんは難し。然れども此は到底答へ得べきものにあらざれば、其の質問を起すは無益の事なり。吾等は此事に就して若し起らざりしならば、如何といふ類の問を起すと屢是れあり。而して此の問題に答ふる者は唯全能者あるのみ。

然れども吾等は將に云はんとす。耶蘇が其の父祖ダビデの位を繼承するに至らざりしものゝ、人類の罪之れを妨げたるなりと。耶蘇が身親らの國のメサヤたらんと云ひし者は。是れ浮薄なる戯言にはあらず。されど此に一の犯すべからざる條件のあるあり、曰く基督は只仁義の國民に王たるを得べしといふこと是れなり。然るに猶太人の敗德は此の時已に其の頂點に達したりしを如何せんや。猶太人等は一びは飽く迄も彼れをして王位に昇らしめんとしたりしが、其の熱望は神の祝福を受けず基督は其の天職を躬行するに至らで止みぬ。

其の後基督の命運一轉し怒濤漲ぎり來り、彼れは虐主を攘ふ者とはならずして却つて壓制の犧牲となり了れり。先導者を盾に載せて歡待すべき同胞國民は外國政府の法廷に敵者の地位に立ち基督は羅馬政府とヘロデ王の前に罪人とはなり給へり。彼れは一國の臣民として恭順を表し、其の從屬には劍を藏むべしといひ聞かせしかども、國家の司法

官は有罪の宣告を下し二賊の間と之れを磔せり。嗚呼此の血は流れて國都の呪となり、五十年を出でざると猶太國は地球の表面より抹殺し去られたり。

是れ國家の不完全なるを示す明證なり。國家ハ生命、財産、名譽を保護し、惡者を懲らし、善人を擧ぐるが爲めと存在す。而して猶太の國家ハ歴史の上と比類なかるべき善人と接すると當り、之れを判じて最惡の罪人となし死を以て罰したり。是れ若し國家法を用ふるの常例とおさん乎。國家ハ神聖なる制度とあらず、最も忌むべき禍害なりと斷言するも不可なからん。不法の犧牲となりたるもの、屢此の如き說を唱へたり。然れども斯る辟見を抱くものゝ少數なるハ尙ほ幸といふべし。要するに、國家の法を立て政を行ふは、無道を懲らし、枉屈を伸ばすとあり。而して軌道の外と走りたるの國家古今と珍らしからず、何れも酸鼻と堪えたり。

凡そ國家の法律の許す所皆悉く義しといいふべからず、さればとて司法官の擬律皆正しからずといふも過てり。而して茲と一の記憶せざるべからざるとあり、我等昭代の恩澤として單と國家の臣民とあらず、又問接若しくは直接と立法者行政者たるなり。夫れ市町村制の實施、國會の開設ハ何れも我等と若干の參政權を與へたるものなれば我等ハ法律をして愈〻神聖と して誤ちなきの地位と近づかしめ、併せて法官の智識を增進せしめ、其の德行の發達を勉むるの責任をも負擔せざるべからざるものとハなりたり。

四

基督ハ失敗の生涯を送り給ひしと似たり。王たるべしと稱せられおがら草莽の一民とも劣れる生活をなし、宮殿と住し給ハずして獄と下され、王位と上らずして、十字架と釘せられ給へり。

然れども人類の惡意とよりて此の如くなりしといふ點より見れば、是れ失敗と相違なしと雖、神より之れを見れば毫も失敗とハあらず。人間

の方より見れば、基督の死い人類歴史の最黒點にして、又無類の過失罪惡なりと雖、神の方より見れば宇内の歴史の最大壯觀なり。蓋し是れよりて人類の罪を贖はれ、神の愛全く露はれ、完全に達るの道い人類子孫の爲めに開かれたればなり、耶蘇は王たるべしとの要求變じて嘲弄の聲となりし時い、彼れ決して全く王にはあらず。其十字架の上にユダヤ人の王イエスなりと書せしものい是れ蠻俗の戲れのみ。而してピラトい耶蘇を嘲けるが爲めに之れを書したれども、今より之れを回顧するに、果して是れ嘲弄あるべきか。寧ろ万代の末までも消ゆることなくして輝ける壯觀にいあらざる乎。基督は恥の頂點に達せし時却つて已れが万王の王、諸主の主なることを証し給ひしなり。

耶蘇い常に其の心底よりして、自已の王たるの確信おりしなり。又眞正の王者は公益の僕たるべく、且つ大多數の爲めに、尤も利益ある事をなす者い是れ最も王者たるの性質あるものとなせり。基督は世間の王者の已れと其撰を同しふせず、却て正反對なることを熟知し給ひしなり。世間普通の解説に云く王者にい多數の之れに奉仕するものなかるべからず。而して其の榮譽の爲めに、又は娯樂の爲めに奉仕する人の數愈多ければ即ち愈大なる王ありと。基督は云く、異邦人の王は其の民を支配す又その上に權を秉者は恩を施す者と稱らる然ども爾曹は如是すべからず、爾曹のうち大なる者は幼か如く首たるものは使る者の如くなるべしと。基督の大を解すること斯くの如し。是れ果して眞ならば、彼れが全世界の爲めに其の身を釘せし、時ほど大なりしことは、之れあらず。然れども、此の大及び王者に關する解説は耶蘇が只已れ一身の行ひに適用せんとには非ず。是れ何人にも遍ねく及ぼし得べき者なり。是れ國家に於る一切の位階を測量る基督教的の標準なり。基督の意に隨へば他人の爲めに尤も大なる事を成せる者は、即ち尤も大なるものなり。嗚呼此の理を解するものは古今甚だ多からず又此の觀念の發達極め

て遲々たり。彼の大なるものゝ、他をして之れに事へしむべく、他人に事ふるものに非すとの異教的觀念ゝ今に至りて政治の大主義にてあるあり。政治ゝ設令ひ利慾の爭鹿場あらずとするも、名譽の賭博にして、奉仕の精神を主とする者に非るなり。往日治者の地位に在りし人々の目的ゝ被治者の損耗によりて己れを利せんとするに在りしが、今時の治者ゝ如何其の精神果して進歩したるや否やゝ我等之れを見んと欲す。然れども基督教的觀念は政治の部面に於ても發達したる所あり。凡そ普通の心を具へたるものゝ、基督の所謂王者ゝ、喜んで其の身を捨て、社會公益の爲めに最難の事業を執り、最多の勞働をなすものなりとの教訓を首肯し、又詩篇記者の所謂「自らを厚するが故に人々爾をほむべし」とゝ今に至りて尙人情に適切なりと雖一方に於ては王者の大小は其徵する租稅の額に關せず。只社會に對する奉仕の大小に由りて判別せらるべき者なりと感する人の數日を追ふて增加せり

第四章　教會に於ける基督

馬太傳三章十三——十五
同　八章四節
同　九章三十五節
同　十三章五十四節
同　二十一章十二、十三
馬可傳三章一——六
同　六章二節
同　十二章四十一——四十四
路加傳二章廿一——廿四、三十九、四十一——四十九
同　四章十六——三十二、四十四
同　廿二章五十三
約翰傳四章二十二
同　五章一
同　八章二十
同　十章廿二、廿三

馬太傳九章十——十七
同　十二章一——十四
同　十五章一——九
同　十六章六
同　廿三章
路加傳十章三十一、三十二
約翰傳二章十三——二十二

馬太傳二十四章一——二
同　二十六章十七——三十
同　二十八章十九、二十
約翰傳二十章二十二、二十三

第四章　教會に於ける基督

或點より見れば、教會は家族よりも尙ほ狹少なる團体なり。蓋し家族の一人之れに入りて、他へ取り殘さるゝことあればなり。然れども又或點より見れば國家よりも尙ほ廣きものなり、蓋し國を異にする人民能く同一教會の會員たるへければなり。

家族と國家とは人性固有の勢力及び固有の法則よ基づき、人間の天性より發達したる制度なり。然れども教會へ神の建て玉へるものにして此處に撰はれたる靈魂を集め、又之れよ與ふるよ、超自然の恩賚を以てせんが爲めなり。無論人間の天性に其の根蔕を有せざるよあらすと雖、此の根蔕へ、人間を主人公とせる此の世界よりてへ絶えて見るべからざる喜樂と滿足とを慕はしむる種々の感情よして、只天より之れを稟くべきものなりとす。天啓なければ教會なし。教會の堂宇は高く普通

人家の上に聳えて、其頂上能く蒼空を摩するが如く、教會も亦人間が天の命(即ち神の恩寵獨り之れを供するとを得る神の生命、永遠の生命)を慕ふとの表記なるなり。

一

耶蘇は已に天啓の上に築かれ、神の恩に支配せられたる眞正教會の存在せし國に生れ給ひ、即ち神の子なる事また榮光、また盟約、また律法を立られし事、また祭儀また約束に關係ある國民の子たり。彼れは普通の關門なる割禮を受けて教會の一員となり、數週の後ち主に屬したるとの確証として一般猶太の兒童と等しく神殿に献けられたり。斯くて此の事を自覺するに至らざる前、地に屬ける父母の願ひにて神聖る禮式より、神の見ゆべき教會の中に入れられ玉へり。

今日にては信者の慣例として其の幼兒を神に獻ぐることあり。然れども其多くは成人に至りて後ち自ら神の家と相密接せしめんとの願望を顯らはすとなし。之れに反して耶蘇は自ら己れの意志を行ふに堪えたるものとなり玉ひし時、父母の敬虔なる願望を取りて己れの物となし神の家を愛するの情を發達せしめ玉へり。年甫めて十二、エルサレムに於て父母を見失ひし時、父母は四方を探りて之れを神殿に見出せり。而して其の之れを探りし勞を語るに至りて、耶蘇は驚ひて、何を以て我れは殿の外にあるならんと思惟したりしやと詰問せり。耶蘇がナザレに閑日月を送り玉ひし時には、期を定めて屢々神の殿に詣り玉ひしとは疑ひなき所にして、又其の間絶えず安息日毎に他人の說教を聽き玉ひしことゝすれば奇異の想ならざること能はざるなり。斯る事なせし人は如何なる人なるべきの乎。彼れは聖き子なる人なるべきの乎。思想は陳べし時の言葉に至らしめ、他日世に立ちて牧場に供するの力あり、し賢人なるべきの乎。又彼れの渾身は、化して耶蘇が他日パリサイ人及び學者を責むるに至りたる者なるべき乎。夫れ如何なる集會といへども童兒の集會を牧するに恐ろしきは無し。而して毎日曜日に我等の前に其の胸中に未來の木鐸なるに足るの思想を蓄へたる人ありて我等を支配するに至るは人なるべし。

其のナザレの茅屋を辭して公けの傳道を初め給ふよ當りてゝ亦定期にゝ必らず神の殿よ詣り給ひしなり。是れ實ゝ其の傳道事業の發達したりし中心なり。耶蘇ゝガリラヤの諸會堂に於て奇しき業を行ひ給ひたれども猶太人禮拜の中心たるエルサレムの神殿を忽諸にし給ひしにゝ非ず。彼れゝ祭節に期を違へずして參會し、エルサレムよ踰越節を守らんが爲めよ弟子と共に座し、亦た神殿の庭よ於て敎を述べ給ひ、禮拜式中の俗事なる錢を拂ひ出すとすら、空しく看過し給はざりしなり。即ち耶蘇ゝ神殿の租稅を拂はんが爲めに、彼得をして魚口を探りて錢を取らしめ又神殿の錢箱の中よ僅か許りなる錢を投せし寡婦に、熱心なる贊辭を與へ玉へり。

己よ斯くの如くなれば、耶蘇ゝ熱心よ神の殿を愛せし者なると亦明白なり。主ゝ彼のダビテと共よ万軍のエホバよなんぢの帷幄ゝいかに愛すべきかな。わが靈魂ゝたえいるはかりにエホバの大庭をしたふ。なんぢの大庭にすまふ一日ゝ千日よもまされりと宣ふを得たりしなり。

當今の世吾等時としてゝ宗敎家を以て自ら任する人よして公開の禮拜なきも宗敎はさかふべしとなし、之れを等閑にするとあるを聞く、而して細故を口よ藉き、又は何等の道理もなきよ、目に見ゆる敎會ゝ己れよ益なしとして之れを退け去らんと欲す。是れ耶蘇の行ひ玉ひし道よゝあらざるなり耶蘇在世當時の敎會ゝ純粹の者よあらざりしを以て彼れ若し他人あらば、己れよ益なしと考へたりしならん。されど耶蘇ゝ期を違へずして其祭節よ侍し、熱心之れを愛し玉へり。夫れ耶蘇がナザレ村よ於て共よ禮拜を遂げ玉ひし會衆の如く其の理想低く若しくは彼れが聽き玉ひし說敎の如く不充分なるものゝ、世亦其類多しとも覺えず。然れど耶蘇ゝ其の小やかなる會堂よありて自ら嚴肅なる心を抱き、聖書を朗讀するよ當りてゝ、前代の豪傑聖人其の周圍よ集ひ至りしのみならず、此の一小堂ゝ化して天國となりたりしなり。

教會い人性てふ家の窓なり。之れによりて外を眺め、又天際を望む。而して天上の星を望むに未だ必ずしも窓の粧飾を要せざるあり、教會に與ふるゑ最上の美名を以てしたるもの聖書の外ゑい彼のバンヤンが美宮といへるに如くものなかるべし。されどバンヤンの目に觸れし會堂はベッドフヲドシーアなる浸禮派の集合所ゑ過ぎずして、是れとても迫害の時代ゑありては、只禮拜の場所とするゑ堪えたる陋しき建築にして、普通の眼より見れば田間の茅屋と見紛ふ程なりしこと知るべきなり。而してバンヤンの眼に之れを美なる殿とあしたるい其の内ゑ在る疎造なる長椅子に座する時自ら新鮮の感情起り想像の眼い、塵ゑ汚れたる桁の外に馳せて公同教會の華美なる屋根、輝ける尖閣を望むを得しなるべし。凡そ教會堂は其の疎造なると華美なるとを問いず是れゑ眞の威嚴を添ふるものは、即ち神聖なる想像力なり。教會堂い神の家なり而して若し神を愛するの念だにあらば、其の構造は如何に陋しくとも、能く之れをして靈の殿たらしむるを得へなり。

二

基督在世時代の教會い全く神意ゑ基づき、基督も自ら神の家たるを知り居たれども、之れに附屬せる弊も夥しきものなりき。神より出てしものにても、人自ら之れゑ己れの作爲意匠を加ふること無しとせず。斯くて人工い次第ゑ神意と混同し、二者とも等しく神意に基けるものと思考し、因襲の久しき、又其の異同を辨別するゑ由なき、ゑ至れり。勿論智識あるものは、猶ほ彼の樹根の岩石の間ゑ罅隙を探りて沃土を求むるが如く事物の實相を看破したりといへども群民い悉く然る能いす單ゑ人工に係れるものを神意に基けりと誤想して自ら滿足したりき。時至りて一英傑の蹶起するものあり、原始の構造と人工ゑ成れるものとを識別し、群鴉の喧噪を排して其の作り建てたる巣を寸斷し、再び神意のある處を顯表せり、之れを稱して改革といふ

基督の時代より、神の建て玉ひし宗教より人工を加ふるの弊其頂點に達したり。是のごとき弊事い識らず〳〵起り來るものにて其の初めい殆と無邪氣なる考より出づるもの多し。左れと其弊次弟に增長していい神の禮拜に對してすら甚たしき妄想を抱くに至る。禮拜は人間神に近づき其の充てるを以て已が空しき心を滿さしむる手段なり、人之に由りて喜びに滿ち、家に歸り其時に受けたる力によりて世を送るなり然れとも人往々之れを以て神に拂ふ租稅の如きものとなし、依て以て神を慰め即ち我れに一功を加へたりと考ふるに至る。勿論是れ若し神に拂ふの租稅ならんにい其量の多きに隨ふて其功も亦大なるべし。斯くて禮拜式の數加はり新禮典增し神恩を記憶するの念は、人間事功心の爲めに全く沒し去られんとす。

是れパレステナに起りし事實なり。宗教い禮拜式の機械となり、其數次第に加はりて遂に人間の一生に負ひ尽すべからざる程の重荷となり、教職を執るものいやが上に增し人民い儀文の繁夥なるが爲めに常に戰〳〵兢々として安き心もなく、宗教の樂しみ滅え亡せて迹なしとの感を抱かしむるに至れり。又聖職にあるものすら自ら天の命する處を行ふ能いず、尋て僞善の弊を生じ、言行常に一致せず、苦辛愛憐を粧ふて曾て一舉手一投足の勞だも執ることなし。實に是れ革命者の現出せざるべからざる機會とはなれり。而して其任い基督の肩上に落ち來れり。

其の革命的熱情の初めて爆發したるものい、商賈を神殿の外に逐斥し、此に傳道の端緒を解き玉ひたる即ち是れなり。夫れ商賈等のなせし處は、其の當初は善意に出でゝ、祭節の時、遠路を冒してエルサレムに詣づる外邦の禮拜者の犧牲を携ふる能いざる者に牛亦い鳩を賣るにあり。又彼等い兩替をなし、外客の爲めに尠からざる便益を與へたり是れ原と必用の事なりしと雖惡弊日を追ふて加いり、動物を賣るに不當の價金を貪ぼり、兩替を爲すに不當の手數料を要請し、客を呼ふの聲い喧噪

耳を聾して禮拜を妨げ、而して其の數の多き、異邦人等い殿の大庭と座するに由あくして境外と推し出さるゝと至れり。要するに祈りの家い變じて盜賊の巣窟となりたるなり。耶蘇い祭節と宮と詣で給ふ毎と之れを目擊して屢逆鱗し玉ひしが一朝豫言的の靈氣之に降りて其の傳道を初め玉ふに當り、先づ鋭鉾を此に向けて神の家を潔め給へり。即ち彼い繩を以て鞭とし、彼の貪慾と眼昏める群衆を叱咤す。彼等い案倒れ牛走るの間を遁れ惑ひて、基督の聖き怒りを避んとす。其の光景い宛然改革者の活畫といふべし

世と傳ふ祭司長の家族等は此る不正の商賈より其の所得を收めたりと。されば其所得を傷けたるの人と對して無論不快の感を抱きたるべし、又耶蘇は僞善的の長き祈りを爲し慈善を行ふと喇叭を吹き立る慣習を罵り、爲とパリサイ徒の怒りを買ひたり。基督い斷食せず又安息日の虛禮を守らず、稅吏や罪ある人と交り、之かために甘んじて罪人なりとの誹りを受け給ひしが、後其熱腸遂と破裂して僞善者の假面を剝き、之を罵りて盲者の嚮導者たる盲目、骨を滿たせる白き墓なりと言ひ、最と嚴かに彼らの眞相を表發し玉ひたり、

耶蘇は斯くの如くとして神の家に着ける汚物を洗ひ去り、之れを其の無垢の原形に復し玉ひたりと雖、之か爲めに奇禍を買ふに至れり。基督が防遏せし毒流の源泉たる祭司、又その剝ぎ取りし僞善の仮面を粧へるパリサイ徒い、怨嫉の情止み難く遂と之れを十字架に釘するに至れり。此に於てか耶蘇は革命者たるの名と加ふると更らと殉證者といふを以てし、万代の末までも綿々糸を牽ける殉證者の一隊の領袖となり玉へり。

此の殉證者の一隊と名を聯ねたる人にして、兼ねて改革者たるものも尠からす。彼等い各自當年教會の腐敗を見て憤慨の念禁する能はす。皆難と死せり。蓋し新約の教會といへども、腐敗の毒流に陷るの危險は舊

約の教會と少しも相異なる所なけれいなり。夫れ吾等が革命者の尊稱を贈らんと欲する諸人傑の時代よりては、基督教會の事情大よ基督の時代よ於ける舊約の教會と相類したるものわり。人工は全く神の手工を掩ひ、宗教その容を變しで神の恩惠を授くるものといならず、却て繁文縟禮を設け、其の功よりて神の恩惠を領せんとし、聖職を帶ひたるものい盲者の嚮道する盲者となり了れり。改革一たび起りて神い此の事体を一洗し、以後亦斯る改革を要せざるよ似たり、然れば今日の信者各自の附屬せる教會に於て、弊の改むべきものなしと心得るい、畢竟空望のみ。我等が自ら心付かざるい全く此の弊なきの証にい非ず。往時腐敗の項點よありし時すら、一人も其の弊を悟ることなく、荏苒人傑の崛起して一々之を指摘するの日に至れり。且や必然改むべき弊を固守して尙は自ら神の爲めに力を尽くせりと誤想する者に至りてい、古往今來未た其迹を絶ちたることなし

三

改革者と云へる名稱い、名實相適ふの場合よ於てい教會に於ける重き名なり、而して基督い之より重大なる名を負ひたまふ、蓋し基督い教會の創立者たるを以てなり。

基督の養育せられし舊教會は已に滅し去らんと欲し、氣息奄々たり。即ち聖殿を指して一の石も石の上よ圮れずして遺らじと豫言し玉ひザマリヤの婦よ告げて爾曹父を拜するいゲリジムのみにもあらず亦シオンのみにもあらずして、眞の拜するものい、至る處靈と眞を以て拜するの日きたらんと宣へり。而して其死するの日、殿の幔上より下まで裂て二とかれり

耶蘇い其の血を以て新約の教會を建て玉へり。其の濺ぎ玉へる血い、往きに牛羊の血を以て彌縫せし神人間の關係を變じ、全く新なる關係を確立したりしが、聖餐の制を設くるに當り、是れ新約の我血なりと宣ひ

しものは、即ち是れが爲めの故なり。今や新あるる神の家ゝ、基督の顯彰せる父の榮光に輝され、其の生命もて購ひ玉ひし豊富ある聖恩、之れに充ち滿てり。

されど創立者ゝ新たに神の家を起すに當り、全く舊材料を棄つるとなかりしあり。即ち師弟打ち集ふて、踰越の節筵を行ひし夜直ちに其の材料を採りて聖餐の制を設けたり、又その禮拜の式といひ會務を司る者といひ、往時教會の制度に髣髴たり。況んや、聖徒と英傑の影像を描き出せる舊約聖書ゝ、新約聖書とゝもに一卷の全書たるをや

耶蘇は仔細に新約教會の設計をあし玉ゝず。只他人のなす能はざる基礎を居き、其構造の概略を示すを以て滿足し玉ひしなり。彼れゝ之れゝ托するゝ其の福音を以てし、命じて之れを万靈ゝ傳へしめ、之れゝ附するゝ十二使徒を以てし、其の力と其の教によりて遺業を大成せしめ、會吏ゝ權を與へて會員の進退を司らしめ、聖晩餐と洗禮の二典を設け約束を遺して代々の人々ゝ希望を與ふ。其言ゝ云く。見よ我れゝ世の終りまで常に爾曹と共にあらん

基督の礎石を居くゝ、宜しく一度なるべくして之れを再びするを得ず。人或ゝ叨に夢想して今の基督教會瓦解して、他の制度之ゝ代るべしと云ふ。然れども基督のほかゝ誰も基礎を置くこと能はざるなり。此の基礎の上ゝ教會を建つるゝ、今日我等の任にして、之れを建つるゝゝ曾て其の基礎を居きたりし者の事業を祖述し、又同精神を抱くゝあらざれば成就すべからず。

第一之れを建つる者ゝ果して正しく基礎の上に置きたるや否やを考へざるべからず。凡そ基督信徒の事業にして基督の嘉納し玉はざるべきもの少からず、皆是れその居き玉ひし基礎の上ゝあらざるが故なり、若し夫れ基督が其の事業の根據となし玉ひし新約の血を棄てゝ省みるとなからん乎。又若し弟子等が主の名に依りて居きし基礎を度外視

せん乎。我等自己の教會を設立するを得べしと雖、主ゝ我等の勞を認むるとなかるべし。

之れを建てんと欲するものゝ、皆主の聖き熱心を奉體せざるべからず、主ゝ人の靈魂を贖はんが爲めゝ死するを以て自ら屑しとしたまひしが我等ゝ此の事業を稗補せんが爲めゝ何等の犧牲を供する心掛あるか。主ゝ生命を抛てり。我等ゝ勞力と金錢とを抛つべき乎。耶蘇が人間の靈魂を救はんとて死し玉ひし所以の者ゝ、唯一の靈魂も全世界より貴しと信じたればなり。我等も亦見て以て貴しとなす乎、其の休戚ゝ我等の心を病ましむる乎。其の罪は我等を傷ましむる乎。其の救はるゝとゝ一の罪人悔ひ改めし時天の使の歡ふか如く我等も亦之れを歡ぶ乎。基督教ゝ其の神性たる犧牲に其の傳道的性質を失ひ、單に教育的制度となる時ハ、即ち其教の救ふの力を捐つる時は其の教會たるも或所以あるもなし。基督教ゝ其の不道德に且つ害惡あるも或は尚ほ有用なる制度たるを得べし。而して若し迷へる者を救ふの力を有する時は例ひ他に欠點ありとも是れ尚ほ神の寐屋は人の間にありといふを得べきなり。

然りといへども、此の家を建てんと欲せば當ゝ熱心のみならず、又聖別せる新機軸を必要とするなり、前ゝも云ひし如く教會の組織ゝ付ては耶蘇ゝ只其の梗概を示し玉ひたるのみにて後世をして專ら自ら基督の事業を成就するの最良方を求めしめ、教會ゝ今や熱心之れゝ從事せり。而して自ら解釋するの新問題と、成就せざるべからざる新事業續出するを以て教會ゝ之れを計畫し、之れを成就し、事業の進歩を助くる發明者及ひ先登者を要す。譬へゝ初めて安息日學校を建てたる人の教會に及ぼせる恩澤の如きゝ、殆んと、其の量を知るべからず、彼れ必しも教會の要地を占めなる人ゝあらず。又決して名聲藉甚の士ゝあらざりしなるべし。而して自らなすべき必用の大事業あるを發見し其の卓見を用ゐて即ち之れをなすの最良手段を發見せり。彼れゝ足を小兒の世界ゝ蹈み入れ、將來斯くも美ゝしき田園ゝ其の跡を尋る億万の收穫者ゝ最良の事業を授けたり。基督信徒のなすべき事業此の外ゝ尚ほ多し。如

何として基督教的思想は靈性的智識の鑛山を堀鑿し又如何として基督教的品性は靈性的進歩をなさしめ又如何にして基督教的熱心は社會の片隅にある者の靈の欠乏に應するかを示すい是れ無上の偉功あるべしと余い信ずるなり。

第五章　朋友としての基督

馬太傳十章二—四
同　十一章七—十一
同　十七章一、二
同　十八章六、—十
同　廿一章十七
同　廿六章十四—十六、三十七、三十八、四十、五十
同　廿七章三—五、五十五—六十一
馬可傳五章三十七
同　十八章三、四

路加傳八章一—三
同　十章三十八、四十二
同　十二章四
約翰傳一章卅五、—五十一
同　十一章
同　十二章一、—七
同　十三章一—五、二十三
同　十五章十三—十五
同　十九章二十七

第五章　朋友としての基督

一

夫妻の道、親子の際、兄弟の睦みを説けども、一言も朋友の交りを及ふことなしとゝ新約全書に對する異論なり。

之れを説かざる所以の理由として提出せらるゝ者一にして足らず、而して之れを細論せさるに先ち、實際新約全書ゝ之れを説かざるや否やを研究すると全く無益にあらず。新約全書果して朋友の交りを疎畧にせし乎。

余ゝ敢て云ふ、新約全書ゝ此の問題を討究するものゝ第一位に居ると。夫れ朋友の交誼の最高の摸範ゝ耶蘇に在りて存す。眞實の交りを結ばんと思ふものゝ、此の明鏡に照して具さに考へ見よ。

論者云く。此の例は首肯し難し耶蘇か交際し給ひしゝ即ち救ふ者と救

いるゝと者との關係にして地位の甚しく異なる者の間に在りてゝ眞の交誼成り立ち得べからすと。

されど耶蘇ゝ自ら十二使徒の友と稱し給へり。又十二人の中よりても特にペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を撰んで之れに交り、三人の中にても尤もヨハネを愛し給へり。又耶蘇ゝマルタ姉妹及ひラザロを愛し給へりとありてベタニーの家族一同にゝ其交誼の厚かりしと明白なり。耶蘇を以て單よ救主と見る時ゝ彼是に偏頗あるへからす。何れも一樣に愛し給ひしに相違なけれども上に引用せる諸例ゝ其の門徒中よりて甲に對する交誼ゝ乙に對するよりも厚かりしを見るに足れり。而して救ひ主と救ゝるゝものとの間に存する廣く且つ高き關係の中に朋友たるの交誼を保つの余地は充分よ存し居たるものと知らるゝなり。

二

朋友の問題を論するものゝ中に最善の朋友とゝ尤も深く愛するものをいふ乎。又ゝ尤も大なる利益を與ふるものをいふ乎との議論あり。兩論とも其の理あるに似たり。蓋し一方よ於てゝ物質上の補助を與ふる能ゝさる卑しき人よても、無限の親切を表するを得べく、又一方に於ては何人よも免れ難き種々の不運に際會したる時、己れの身よ代へて其の朋友なるの故を以て盡力する人あらば、いふべからさる益あらん。されど兩者とも未だ上乘の友誼にゝ非ず。尚は他に之れよ立ち優りたる者ありて存するなり。

此の幸福の泉水を飲みし人々よ自ら省みて其の中如何なる物が尤も美なりしやを考へ見よ、其の交際ゝ曾て尤も美はしき經驗を以て伴はれたる朋友のことを考へ見よ。斯くて汝ぢの交情の喜ひの骨髓ゝ何物なるやを考へ見よ。若し其の友誼よして高尚なるものならしめば、其の骨髓ゝ即ち其の人の價値なり。彼れゝ眞實を守るを以て意氣互ひよ相投じ、猜疑の念少しも其處を得る能ゝざるべし。此の世ゝ僞りと失望のみ

おれども、そが中に獨り汝を誑かさゞるものあり。汝ぢゝ人間の無情を嘆ずるとあるべしと雖、獨りその朋友の肖像ゝ常ゝ人間ゝ信用を置かしむる方便となるべし。是れ實ゝ質樸、清潔、高尚なる人と交ゝる友誼ゝり得べき無比の利益なりとす。

果して然らば、耶蘇の交情能く人を感動悅喜せしむるの力ゝ甚だ大なりといはさるべからず。人生の凡庸不完全の例すら世人の知れる如く深き慰めを與ふるなるに況んや其情ゝ神と人とゝ至清の愛を表し、其心ゝ福音書ゝ見ゆる如き思想の無盡藏ゝてあり、其性質ゝ如何ゝ精察すればとて一點の瑕瑾もなき人と、親しく交はるに於てをや。我等大家善人の記錄を讀む時ブレートーと共に其花園ゝ遊び、ルーテルの談話を聞き、ベッドフォルドの街上ゝバンヤンと共ゝ座し或ゝコルリッヂの金口より出で來る哲學を聞きたしとの念禁ずる能はざるとあり。されど耶蘇の足下に跪きて其の言を聞きしマリヤ、其の胸ゝよりて心臟の鼓動ゝ耳を澄ませしヨハネに比ふれば又いふに足らざるなり。

三

以上述ぶる所ゝして果して友誼の最高のものならば愛ゝ即ち其の第二位ゝあるものなり

友誼ゝ同鄕の人若しくゝ同窓の學生なるよりして互ひゝ得る處あらんとする念をいふにあらず。又軒を并べて住し日々ゝ語り合ひて相知るゝ至りし人の一月も別居しなば互ひに相忘るゝ如き隣保の情をいふに非ず。又權略家の會合をいふにもあらず。偶然旅行中ゝ得たる言敵をいふゝもあらず。政黨員の聯合をいふゝもあらず。眞正の友誼とは常ゝ精神と精神と相給合し情意と情意と相交換するものをいふ。舊約ゝ其の例あり、曰くダビデ、サウルゝ語ることを終へしとき、ヨナタンの心ダビデの心にひすびつきてヨナタン已の命の如くダビデを愛せりと、此の如き一致ゝ一たび結んで又解くべからず。之れを解くものゝ只肉を剝き腸

を斷つ如き慘戯を演ずることあるのみ。然れども眞正の友誼ハ婚姻の愛の如く一時ゝ只一の目的を抱くことを得と主張する論者ゝ與みする能ハず。人間相互の關係の玄奥に達した る當世紀の思想家の一人ハ堅く此論を執り。之れに反對するものあれバ君ゝ一人以上の朋友あるハ、是れ未だ眞正の朋友なき証ありと反論して其の口を噤せしむ。然れども是れ此の感情の性質を誤解し、全く殊別なる情に屬せる規則を適用したるゝて、彼の基督の事例は、余の見解を助け、友誼ゝは種々の度あり、且つ情意ハ一時ゝ種々の友誼を有するものなることを証するなり。

四

朋友の愛ハ主動的にして喜んで相助け相益するものなり。古人友誼の義務を論すること頗る熱心なり。彼等ハ甲、乙に對して何をなすべきかといはず。其の義務を尽くすことを止むるハ如何なる點ゝあるかと云へり彼等は已れの朋友の爲めにあらん限りの力を尽くすを以て勿論のことゝなし、唯其の爲す所若し家族ゝ對し國に對し神ゝ對する一層高尚なる義務に撞着する時自ら制して手を下す勿れと云へり。此意ゝ基きて彼等ハ一壯年の帽を被らず疎服を着したる肖像を作り、衣服の端ゝハ生死の二字を記し、友誼の生死ともに渝らざるを示し、其の前額ゝハ夏冬の二字を記し、友誼の禍福によりて二三ならざるを証し、又左の肩と腕とを露はし、右の指は心臓の邊りゝ記せる遠近の二字を指して友誼の時間及び距離の爲めゝ異ならざる意を表したり。此の點に關しては耶蘇の友誼ゝ於て其の例を示すと容易なり。中に在りて尤も着しきものをラザロの死及び蘇生ゝ關する擧作とあす。此の際ゝ耶蘇のなせし所は一々その性質を表するゝ非ざるはなし。彼れは友の訃音ゝ接したれども、一層勝れたる賜物を與へんとて二日間元の地ゝ留まり、十二使徒の氣遣はしく思ふゝも拘らず、危險を冒してユダ

ヤよ行きマルタの信仰の弱きを暖め、マリヤよゝ密かに人を遣ゝして此の大奇蹟を見外すとなからしめ、其の深き愛情は溢れて涙となり、見る者をして如何ばかり彼を愛する者ぞと呼ばしめたり。又豫め祈りをあして死せるラザロの出で來るも驚くとならしむる等用意至らさるなく、遂よ之れを甦らしめ王ひしが、其の愛情は婦人の心の如く優美よ、死の如く強く、天の如く、寛廣ありしあり。

されど友誼の力ゝ、時として、其の人を惠むよ惜む所なきが如く、又人の惠みを受くるよ挾む所なきよりて顯ゝる。是れ他人を信じ、他人を愛するの証なり而して耶蘇ゝ、約翰よ對して其の友誼の深厚なるとの一証を示し給へり。彼れ十字架よ係り乍ら愛する弟子約翰よ對してマリヤをその義母とせんとを乞へり。友誼上より發したる言の中、之れよ優りて美なるものは、未だ曾て是れあらざるあり。耶蘇ゝ約翰の意中を探りて之れを乞ひ給ひしにゝあらず。約翰の信仰ゝ今更耶蘇の問ふ所よはあらざりしなり。此の信用ゝ是れ約翰が授かり得る最大の名譽なりといふべし。

五

明友共よありて相慰め、相語らひ世よ公けにするを好まざる秘密をも互ひよ打ち明くるとゝ、世人の熟知する友誼の特質なり。

足下若し甲を求むるならば、乙の所在よ至れ、彼れ必ず在らんとゝ、二人の親友間にありてゝ普通に用ゐらるゝ言なり。朋友の相遇ふや、打ち寛ぎて憚らず其の談話ゝ必ずしも必用なるよあらず、其の沈默の間にも雙方の所思所感を通ずるとを得、二人相對して座する時、言ふとなきも敢て手持無沙汰に陷ゐるの憂なきは是れ眞正なる友誼の特權なり。さりとて一旦談話の門を開けば千言万語滔々として究まる所を知らず、是れ互ひよ包む所なければなり。凡そ友よ對しては恥かしき願望も憶せず物語り、法外なる希圖も恐れず告白し、信用と信用と常よ相密托し、

縱令へば二個の石炭、相離れて燃ふる時は、火力甚だ強からざれども己より相集まる時は、其の勢悽まじきばかりよ加はるが如く、雙方の心相觸るゝ時は、燦爛たる光彩迸り出でんとす。人若し道理の宴會、靈魂の互融する此の樂時の記憶を心よ秘め蓄ふることあくべ、人間の最高なる特權の一を欠けるものとやいふべき。

耶蘇は特よ十二人を撰んで己れの友となし、三年の間は常よ之れを伴ひ給へり。斯くて屢〻之れを拉して閑處に往き、亦は隔てぬ交りを一層深からしめんとて、遠き旅行をあし給ひぬ。約翰の福音書よは、其の話しの摸樣を略記せり。尙ほ該福音と、主として公衆よ對する他の三福音書中よある耶蘇の言の異同によりその心の隱秘を憚らず十二人よ告げ知らせ給ひしことを見るを得るあり彼の二人の弟子が、エマヲよ至るの途上、耶蘇と相語りて、『途間よて我儕と語かつ聖書を解開ける時、われらが心熱しよあらずや』といひしものは、是等隔てなき交際の結菓を見るよ足るものなり。

尤も鐘愛を受けゝ弟子等は、其の恍惚たる心もて基督の廣大幽玄なる思想を窺ふや未だ曾てエマヲ途上よ於けるが如き時の事を忘るゝことなかりき。又彼等は主よ伴はれて暫しの間、共に閑處に入りしことあり變貌山よ耶蘇の榮光を見ゲッセ子に耶蘇が眼を醒して祈らんことを求めし如き是れあり。中よ就て後の一例は是れ基督が憂えを共にせんことを弟子に求めたるよて、いふまでもなく、人類の友たることを求め給ひしなれ。斯くも基督が其の心底を打ち開きて憚らざる乎と思へば、我等怪しき迄よ覺えらるゝあり。此の祈りの時間は、人間の眼もて見んは、余りに畏かりし程あらざりしか。而して其の友よ之れを許せしものは、是れ友誼の特權とじて、宗教的經驗の秘密に深く立ち入らせ給ひしことを証するなり。

此の宗教的經驗の門を鎖ざすものは不完全究まれる友誼なり。蓋し甲

なる朋友は、乙ある朋友の尤も大切なる領分より拒まれたる意味となればあり。此を以て友誼なるものゝ、其の最高の意味よりすれば獨り基督教徒の間にのみ存すと斷言するを得べし。されど基督教徒とても基督の口より出づる問題を自由よ、又度々物語るの地位に達して初めて其の眞意を味ふを得べきなり。

六

友誼は万般の世事と同じく、結果によりて判定せらる。若し人、友誼の價値を知らんと欲せば、その果して汝の爲めよ何をなし、又汝ぢをして如何なる者とならしめたるやを尋ねさるべからず。

耶蘇の友誼ゝ此の試驗に合格したるものなり。彼の十二人を見よ。その未だ耶蘇を知らざりし前の有樣と之れを知りて後、其の感化により如何なるものとなり、如何ある地を占めたるかを考へ見よ。十二人は賤しき人よして、中よゝ非凡の天才を具へたるもあるべしといへども、皆是れ齊東の野人のみ。若し耶蘇なからん乎。彼等ゝ遂よ何者たるをも得じ。彼等ゝ鋤を取りて醉生夢死の一命を過ぐし、ガリラヤの湖邊跡もなき墓中よ葬られ了らんのみ。彼等ゝ足二十里の外よ出でず、百年の間も世人の談柄となるゝ難かるべし。されど耶蘇の交際と、その談話ゝ人類の子としては、尤も善く、尤も懸しき地位よ進達せしめ、その思想と言行とは今や全世界の覇權を握れり。

我等の友誼も亦此の試驗に應せざるべからず。世よは墮落と耻辱よ陷らしむることゝ例へゞ磨石の如き友誼もあり。されど眞の友誼ゝ清潔に且つ高尚ならしむ。朋友ゝ第二の良心たるべきものよて、其の忠告ゝ進歩の刺激たるべし。されゞ二人若し其の居處を距つとも、朋友の記憶だよ心に存することあらゞ、鄙しき思ひ、鄙しき行ひを謹むよ至るべし。例ひ良心を怖るゝの念、未だ惡よ陷るを制するよ足らずとも、己れの行ひよして朋友の制裁に遇はんことを知らば、鄙しき行爲を制抑するを得

べし。

友誼の特權中尤も貴ふときものゝ一い、朋友たる者、我等の過ちを忠告するの權利あること是れあり。何人よりも已れよりも見へで、他人の眼には明かなる惡癖なきいなし。而して品性、危險に迫るとあれば、朋友先づ已れの知らざる前より之れを警誡す。之れを告ぐるよ道あり、之れを容るゝよ德あるくんばあらず。されど諫言い耳よ苦し、此の苦き諫言こそ、即ち友誼の上に於ける最高の天賜なれ。

されど我等其の感化より生ずる友誼の價値を賞揚すると同時に、此の倫常に對する自己の行爲も亦前條述ぶるところの如くならざるべからざることを記憶すると頗る必要あり。余が彼れの朋友たるは、我が朋友よ對して宜しきとなるや、彼れの判斷力全く成長せし時、彼れは彼我の關係を見て喜ぶべきや。人々此の問題に答ふるよ躊躇すべしと雖、若し世に熱望懇禱すべきものありとすれば、我等の友誼の我が愛する者に害を及ぼさず、之れを墮落せしめずして、却て進捗せしめたしといふに過ぎたるもの斷然あることなし。我等若し年已に老ひて頭上霜を戴くの時、又い地下の塵となりし日よ於て、人あり、云く『彼れが感化は、余が生涯を救濟するの元素なりき。彼れい余をして善を信せしめ、又人性に重きを置かしめたり。余は彼れの知已たりしことを神よ謝す』といふものあらば、人生の勳爵之れに過ぎたるはなかるべし。

斯る感化を發揚せしむるの保證は、善良なる感化の泉源と常よ密接して居るの外に其の道なし。基督は昔しパレステナよ於て彼得、約翰、雅各、マルタ、マリヤ、ラザロの友なりき。彼れは今日尙ほ人類の友なり。我等も亦意あらば、彼れい我等の友とありたまはん。彼れと共に歩み、彼れと共に語るもの、世其の人に乏しからず。眼醒むれば即ち彼れよ遇ひ街を行き、事を執るも亦彼れと共よす。彼等は之れに告ぐるよ胸中の秘密を以てし、要する所あれば即ち之れに訴ふ。彼等と耶蘇との交際は、世間普通

の朋友の交際の、及ふところよ非ず。此の人々い即ち基督の生涯の實在よりて人生の秘密を感知し、且つ人類の信仰を維持せるものよてわるなり。

第六章　社會よ於ける基督

馬太傳十一章十六—十九
路加傳十五章一、二、
同　十九章五—七
同　廿四章四十一—四十三
路加傳十一章廿七—四十四
同　十四章一—廿四
馬太傳廿六章六—十三
路加傳七章廿六—五十
約翰傳二章一—十一
同　十二章一—八
馬太傳十四章十五—廿一
同　廿六章廿六—三十
路加傳廿四章廿九—三十一
約翰傳十三章一—十五

第六章　社會ゑ於ける基督

基督教徒が社會に出で、働らき、博く衆と交際するゑは困難なる條件少からすとす。之に付きても基督の爲し給へることを見れば、善き摸範を見出すこと難からざるなり。

一

世間の交際ゑ關して、主耶蘇の擧動と施洗者ヨハネの擧動とは、互ゑ著るき相違あるを見る。ヨハネは人の住居を離れ、遠く沙漠ゑ隱れて、社會を避けたり。身ゑ駱駝の毛衣を着す。其の衣服已に市人に適せざるあり。平生に蝗蟲と野蜜とを食ふ。其の食物い世棄人の用る所のものなり。耶蘇基督い即いち然らず。ヨハネの如く人の我に來るを待ち給いず進んで其の群ゑ入り、村に、都に、街ゑ、市ゑ、會堂に、聖殿ゑ凡そ二三人集り居たるところゑい、敢て自ら其の圍欄ゑ入を辭し給はざりき。主い人の家

に行き、喜ぶ者とゝもに喜び、悲しむものとゝもゝ悲しみ給へり其の宴席に出で給ひしこと屢あるは、福音書ゝ見えたるが如し。主が傳道の起初は、婚筵の席ゝてありき。馬太が饗筵を設けしとき、耶蘇招かれて、稅吏とゝもゝ其の席にあり、また稅吏なるザアカイが家ゝは、自ら推して饗應ゝ招かれ玉ひしことあり。世に聞善からざる徒と交際したまふものから、主を誹るものもありたり。また世に時めき、隨分名譽をも有せる輩ゝ招待せちるゝときも、耶蘇は輙すく之を承諾たまひき。主がパリサイの徒と食事を同にしたまへることは、路加傳に記載せるもの三ヶ所ありしと覺ゆ。

耶蘇とヨハネとが、此の事に付き、斯くまでに、相異なるは、甚だ著きことなり。此の二人ゝ隨從せる門徒ゝ、各々其の師たる人ゝ倣ふものなり。左ればヨハネの門人禁食し耶蘇の門人は然せずと云ふが如き結果を生することとはなりぬ。是は抑何等の辭を以て辨明すべきものにや。

蓋し社會ゝは嶮岨多し。肉体の慾、眼の慾、功名の慾、榮利の慾みな彼所ゝ在るなり。一人獨立するとき、確然として動がさるものも、人衆の間ゝ入ときゝ、忽ち其の身を亡ぼし、家を亡ぼすこと、吾等の屢目擊するところゝあらずや。ヨハネの時ゝ當り、世太く衰へ、道將に地を拂いんとす。其間にありて、能く嚴正の宗教道德を維持せんこと容易の業ゝあらざるなり。此れヨハネの門人等が最も難とする所なり。ヨハネ思へらく彼等をして、其の節操を保しめんと欲せば、現の社會を避くるゝ如かず、良し多少忍び難きことあるも德を破り道ゝ違ふゝ如かざるなりと。されどヨハネも亦已れの足らざるものなることを知し居たるなり。シユライルマーヘル云く、ヨハネはモーセがピスガの峯より約束の地を望みし如く、遙かに基督の美、自由、榮光に注目したるなりと。同人の著述中に（Predigten VOL. 中に、本書の畧圖とも いふべき四種の議論あり、即ち下の如し、教師たる基督。奇蹟の執行者たる基督。社會生活に於ける基督。弟子間に於ける基督。）然れども主耶蘇基督ゝ道德の力ゝ充ち、宗教の精神圓滿したまへるものから、自ら俗間ゝ入りて、其の汚れを受くる氣遣ひなし。其忠實なる門人は、主より同一の力を賦與せ

らる。基督は新らしき元氣を以て、人心に嵌入れたまへり。眞正の基督教徒は社會に依りて作れず、社會を作るべきの義務特權を有するものなり。故を以て主はヨハネと異なりたる方向を取りて、其の門人を教へたまへり。

基督教徒の世間の交際に於るや、其の方向は、ヨハネと耶蘇が迭に取れる二者に過ぎざるべし。果して自らの信仰を維持すべからず、之が爲に靈魂の亡を來すことあらんと斷定せば、舊つてヨハネの擧動に倣ふこそ道理なれ。汝の目、汝の手足、若し躓きの原因とならば斷じて之を拔き、之を截り放つべきのみ。然れども耶蘇の方法は、之に比して更に殊勝なるを覺ゆ。凡そ基督を敬愛するに、忠誠を以てし、其の元氣を受け續ぎたるものは、謹んで主の行爲に倣ふも、また何の不可か之あらん。此れ基督教徒として、最も適當き擧動に非ずや

二

地に在りて基督の天職は神の愛を顯彰し、人をして神を愛せしむるに在り。基督は燕居にも、公會にも、常に此の使命を帶ぶることを忘れず。凡そ此の目的を達するに便りあらんことは、細微といへども、之を輕んじ給ふことなかりき。

賓客を愛し、友人を接待すの益一にして足ず。互ひに人を離隔するの墻壁を取り毀ち、相愛の厚情を起さしむるは、必らず其の一つとして算へらるべきものなり。遠く隔たりて在るときは、由もなき誤解、人の間に生し、猜疑危懼の雲霧交情を冷ますことあり。然れども面前に相見て、話說するときは、忽ちにして、雲霧晴やかに、自他の精神を熟知し、友情頓に熱し騰るを見んとす。未見の惡人、相見てのちは善人となり、天の一方に在りては互ひに仇敵の想をおしたるものも、相隣りて住居するに至りて兄弟當ならざるの想をおすことあり。怨恨忿恚の念は遠くに生じ、近くに亡ぶるものなり。客を愛し、人と相交り一室に集り、和樂して、相語るの

利益、如何ばかりぞや。

交はるゝ禮を以てすべし。饗すゝ敬を以てすべし。禮讓ゝ社交の一大要具なり。決して輕んずべきものにあらず。耶蘇客となりて人の家ゝ招るゝときゝ、自から禮を守り、主人ゝも之を要求し給へりと見えたり。或るとき耶蘇の主人公たりし人、相當の禮を以て之を接待せざりしことあり、彼思へらく、耶蘇の名聞甚だ高し。之を招きて、其人を見、其の言を聞くもまた善からずや。朋友を集めて席ゝ陪せしむるゝ、我に益あることにあらずやと。彼ゝ眞實主を敬愛したるゝゝあらざりしなり。彼ゝ横柄ゝ耶蘇を迎へたり。同等の人、客となりて來れば、常に洗足の水を與ふるを以て禮とせり。然れども耶蘇ゝは之を與へざりき。耶蘇ゝ此の無禮を感じ給ひき。故に食卓を退く前ゝ當り、主人シモンが無愛の心、淺狹の胸を暴露し。一々其の欠禮の点を擧けたまへり。其の言憤然として激したるものゝごとし。

然れども眞正の愛動くときゝ、敢て杓子定規の虛文虛禮を以て之を抑制したまふことあかりき。優に柔和きマリヤ、價貴き膏を耶蘇の頭上ゝ注ぎしとき、心狹き人々之を罵り責めたり。噫、愛の道ゝたゝ愛を以て之を知るべし。俗客はともゝ愛の至道を談するゝ足らず。愛ゝ虛禮の墻壁ゝ限らるゝものにあらず。之をして自已の溝路を流通して自在ならしむべし。耶蘇は彼の可憐なるマリヤを辨護し給へり。

其の心に愛以外の念を抱くとあらば、是れ即ち人を接待する所以ゝあらざるなり。他日報酬を得べき賓客を饗し、接待を以て一種の商法とさんとする者ゝ、是れ耶蘇の夙に嫌惡し給ひし所なり。之れを以て自已の榮華を示す機會となさんとする者に至りてゝ、更ゝ卑劣極まれる心底といふべし。奢靡ゝ眞正の接待の死なり。富める者ゝして初めて之れを行ふを得べく、資産の豊あらざる者に至りてゝ、倒産の危險を犯さゞれば、遂ゝ如何ともするに由なければなり。方今の流弊茲ゝ在り。一夜盛

宴を張の費用を以てすれば質素なる數回の饗筵を開くと難からず。斯くて其の區域を廣めんと、盛宴を張りて少數の人を喜ばすに孰れぞ。有り余れる富める人を饗應するよりも年少く、身賤しきものゝ爲めに、門戸を開放するゝ社會有力者の任なり。父母たる者も適宜に其の子女を集め、一卓を圍んで會食すると暇つぶしの爲めに公會に出席せしむるに優れり。

三

耶蘇の招かれて、饗宴の席に至るは、人情を厚らしむること、素より其の目的の一つなるべしといへども、其の志之に止れりと做すゝ非なり。主がザアカイの家に饗應さるゝや、今日救ゝ此の家に來れるなりと宜へり。獨りザアカイの家のみならず。凡そ耶蘇の至れる家、よてゝ多くの人のうへに、救の臨めること、其の例少からざるなり。客を愛すれば會話をなすの機會を得ること多し。耶蘇は人の家に客となりたまへるとき、常に此の機會を利用して、永生の言を語りたまへり。福音書中、耶蘇の語を記載せるもの少なしとせず。其がおかよて食卓演說の割合に多きゝ、吾等の注意すべき事實なり。今日基督教の格言となりて、人口に膾炙し、信徒の重寶として、敬愛する所のものゝ中にて、耶蘇が饗筵によて述べしてとを擧れば『健なるもの醫を要せず、たゞ病めるもの之を要するのみ』『人の子ゝ失ゝれしものを尋ねて、之を救ゝんがために來れり』等一々枚擧するに遑あらざるなり。

宴席の談話は、鄙野に流れ易し。青年の男子相會するの席ゝ、動もすれば、放蕩無頼を行ふの端緒となる。女子の會席ゝ、由もなき風評を喋々し、饒舌聽くに堪へざるの場所となる。食卓の談、親睦會の話し、何んぞ其の輕薄浮虛を極め、宛かも、痴人の夢を說くに似たるや。同人相會するも、才を研き智を練り、志を奬勵するの益少く、徒らに喧しく、徒らに心身を勞して、主も客も、其に獲る所無きゝ、頗る惜むべきことなりとす。斯の如く、

鄙野なる溝路より、會話宴席を救ひ出して高尚有益なる點に進ましめんことゝ、容易の業ゝあらず、之を能するもの、蓋し稀なり、而して之を最とも善く成し得たるものゝ、主耶蘇基督にあらずして誰ぞや。

人の親たるもの、其の家ゝ善人君子を招き、其の會話の間ゝ子女をして善言卓説を聽かしめ、主客の舉動のうちに、高貴なる男子女子の摸範に接せしむるときは、其の稗益果して幾許ぞや。希伯來書ゝ云く旅人を饗すことを忘るゝ勿れ、此れゝ由りて、知らず〳〵天の使を接待したるものあるゝあらずやと。デンマルク國の碩學マルチンセン曰く、客を愛し、旅人を懇切ゝ饗し、親切ゝ行爲ひ、出來得る限り家を開きて之を受け容るべし、是の如くせは、天使を饗應することもやあらん。天使豈人間以外のものに限らん。凡そ神より、遣され高尚深遠なる思想正義凜々たる志氣を懷きて、吾等の家ゝ來らんものは、みな天使なり。其の談笑應對舉作進退の感化は、無量の祝福を齎らし來るものにあらずや。

四

主は啻ゝ客たりしのみにあらず自らもまた人を接待したまひぬ。耶蘇は人を招くべきの家素より無し。然れど野ゝおいて五千人を饗し、四千人を接待したるかごときを見ゝ、何んぞ其の宴會の盛んなるや。

耶蘇の主として、務むるところ靈魂の上にあり然れども未だ曾て肉体を輕忽ゝ視たまひしことあらざるなり。主の宴を張るや、山海の珍味を以てせず、地を食卓とし、青草を「テーブル」掛とし、公開の空氣を以て饗應室の四壁となしたまへり。其の粗末なる之より甚だしきもの無らん。然れども其の宴を主どれる精神は愛なり。己に愛あり饗應の骨髓氣魂已に備はる。何んぞ宴席の四壁燦爛として、食前方丈あるを須ゐん。

耶蘇曰く、我は生命の餅なり。また曰く、我か與ふる餅は吾か肉なり。我世の生命のためゝ之を棄つと。主は是のことく、屢其の福音を饗宴ゝ喩へたまひしなり。

晩餐の禮は主か客を愛し、人を饗するを好みたまへる、最も著明なる例証なり。其の死を表するもの何んぞ餅酒に限れりとせん。然れども其の福音は親睦和樂の福音なり。故を以て耶蘇は世終るまで其の晩餐の席に主人公となり、其の容貌には厚情藹然として掬すべく、其の胸中には寛宏にして吝なきの氣概を滿たしめたまふ。其の背後の壁間に語あり、曰く、此の人に罪あるものを受け容れ、之と共に食ふと。

第七章　祈りの人なる基督

馬太傳十一章二十五、二十六
同　十四章十九
同　十九章十三
同　二十一章十二、十三
同　二十六章五十三
路加傳九章十八
同　十一章一
約翰傳六章二十三
同　十四章十六、十七
同　十七章

馬太傳十四章二十三
馬可傳一章三十五
同　十四章二十二、二十三
路加傳五章十六
馬太傳二十六章三十六—四十四
路加傳六章十二、十三
路加傳三章二十、二十二、
同　九章二十八、二十九
約翰傳十一章四十一、四十二

第七章

いのりの人なる基督

耶蘇基督が神よ祈りたまへるは、如何よも奇しきことよぞある。吾人の確信する如く、實よ神にて在すとすれば、神が神に祈ると云ふは如何にぞや。また何の必要ありて祈りしたまふべきや。

祈禱のことを嘲り棄てんと欲する徒い、其の意義を縮めて只好き天氣獲ま欲し、病癒よかしなどいふ願言たるよ過ぎずとなす。然れど祈禱を以てたゞ我よ入用なることを求むるよ在りとするい、未だ十分よ其の性質を知らざる者の説なり。思ふよ最も善く最も多く祈る人い、決して乞願を主とせざるが如し。其の祈禱のうちよい、靈魂の空虛なるを示すよりい、無乃其の生命の旺盛なるを表すに足るべきもの少からず。此等の人にありてい、祈禱い杯の充ち溢れたるよ異あらずといふべし。斯のごとき場合に於てい、幼兒が毫しも危疑する所無く、万事を其の父に告

げ聞するが如く、祈禱い天なる父と親く打ち語ふことなりとす。聖アウガスチンの告白文を見るよ、徹頭徹尾一つの祈り文よいわれど、已れの履歴を述べ其の意見の重大なるものを叙するを主意となせり。蓋しアウガスチンが信仰の生命溢れて其の平素深奥なる思想を運すや、常に神と交話するの体裁を成せしことゝ見えたり。

祈りなる者果して右の如くなりとせば、永在の子が永在の父よ向つて之を奉げたるも敢て怪しむべきことよいわらざるなり。主が此の意味において間斷なく祈れるは實よ理ありと思ふの外あるべからず。

遮莫基督の祈禱を見るに、御身に必要なるとありて、助けを神に求めたる例し少なからず。希伯來書五の七に曰く、彼肉体よ在りし時哀しみ哭き、涙を流して、死より己を救ひ得るものよ祈り、また懇求をなし、其の敬畏きよ由りて聽るゝことを得たりと、以て見るべきなり。此を説明するい、基督が眞個の人性を具へ給ひしことを以ていふの外あし。本來基督い半神半人など申すべきものよあらず。全く神全く人にて在いすなり。其の行爲および其の自らのことを説くの言を見るに、之を神と呼ぶにあらざれば、甚だ不都合なるところあり。また其の他の行爲言論より之を考ふるときい、此れ人なりと斷言するの止むべからざるを知る。基督い神たると同時よ、また人たるなりと云ふい、決して不敬の言よ非ざるなり。然か言いさるこそ、反ていみじき不敬とい申すべけれ。

基督い人たるが故に、祈りたまひしなり。人類いその最上なる地位よ在るも、弱きものにて已れよ足ること能いず、他よ依り頼まざるを得ざるなり。基督の御自身も、日ごと、神に依りて生活し祈禱を以て此の依頼心を表いしたまへり。基督い實に我等が骨の骨、肉の肉よして、甚だ親密なる關係あること是のごとし。

耶蘇い無罪の人なり。幼より成年よ至るまで其の漸を以て進みたる發育の程度い、何れの場合において、完全ならざることなし。基督い已往

の罪惡によりて、今日力行善に進むの勢を弱めたるが如き人物よあらす。然れど常に祈禱を必要として、問斷なく其の助けを藉り給ひしなり。基督よりて是のごとし。罪あるの我ら、罪に由りて力なきの我らよりて、祈禱の切要なること如何ばかりぞや。

二

祈禱の生涯は、秘密なる生涯なり。眞に祈りを愛するものは、おのれの外には知る人の絶えてなき習慣を有することなり。基督の祈りにして、其の親しき門徒の見聞せざりしもの多かりしが故よ、之を一々福音書よりは記し能はざりしなり。然れど其の傳に見えたるものを見るよ、我らを益すること頗ふる大なりとす。

基督の祈りするや、村を離れ、家に遠かり、寂しき所よ退き給ふを好み給へり。聖書よ云く、彼出でゝ寂しきところに去り、彼所よて祈りせり。また云く、彼自ら曠野に退きて、祈りせりと。殊に山よ入りて祈りしたまふことを好ませたまへるが如し。パレスチナは山また山の國なれば里を距る僅にして山に達するを得べし。家を離るゝ數歩よして、靜肅なる溪間の林、遠く見渡す懸崖に至るべきなり。基督は其の至る所よおいて靜肅なる野邊、山の中を尋ねて祈りしたまへるものと見ゆ。

山野の、都府村落よ於けるは、猶は靜かなる夜間および朝の喧き白晝よ於けるが如し。所の靜肅なるは、山野よ在り。時の靜肅なるは夜と昧爽よ在りとす。されば基督は又屢、祈禱のためよ時の靜肅なるを撰び、終霄祈を務めたまひ、また日の出でざる前よ起き出で、寂しきところに往きて祈りしたまへりとも福音書には見えたるなり。

基督は身貧しくして、止むを得ず、山よ入りて靜肅なる所を求め賜ひしことともあらん。身豊かにして一室を專らよなし得る輩は、之を感謝せよ。矮屋よ住て、一家鼎の沸くが如くよ騷擾しく、靜肅なる所を山野よ求むるの必要あるものよ。汝が主基督は已よ其の美はしき先例を示し給ひ

ぬ。汝の貧苦なる矮屋に居りて、神の廣大なる恩を感謝せよ。

山野に往き、自然の美景に接するいたゝに靜肅なる時を得るのみにあらず、之がために思想を得、感動を得、祈禱の精神を得ること少からずと。

古人云く、山に遊ぶは書を讀むが如しと。また曰く、聳え立つ山に登るい聖殿の石階に登るに異ならずと。皆此の理を言へるものなり。

然れども祈りすること豈たゝ孤獨居るの時のみならんや。基督い、其の門人二三子を携えて、山に登り、野に往き、一室に集ひて祈りしたることもあるあり。曾て合同して祈りの益を敎へたまひて曰く、我爾らに告ぐ、汝の二人ねがふべきことにつき、地にありて相結ぶべきときい、天に在す父は、之を彼らのために成し遂げたまふべしと。人の智惠い同人相集りて語り合ふときに、非常に敏捷にあり、思想湧くが如きことあり。信仰もまた斯のごときものあるあり。二三人集まるときにあたりて非常なる熱度に達し、祈の精神燃ふるが如くあるに至らんとす。基督曰く、二三人吾が名によりて集る所にい、われもまた其のなかに立んと。

三

如何なる時機に際りて祈りすべきことなるや。此い數へ立つるも無益なり。悉く掲げ擧ぐるい出來べきことに非ず。基督は日ごと熱心に祈るべき新なる時機を見出で給ひしことならん。一々之を數へんこと思ひも寄らず。左れど基督の祈りしたまへる時機につき、福音傳に見へたる文章を考へ味ふるときい、吾人を益すること少からざるべし。

一、基督い甚だ重大なる事を爲すに臨めば、必ず特別なる祈禱を以て之が準備をなし給へり。之を例するに、彼の十二の門人を撰びて、其の使徒と爲し給へるがごときい、基督の將來に關するところ、實に容易なることにあらず。聖書に曰く、當時耶蘇祈禱のために山に往きて終夜神にいのれり。夜明けて耶蘇弟子を呼び、其のうちより十二人を撰び、之を使徒と稱くと。使徒の撰擧い主が終霄の祈りの結果たりしこと以て見る

べきなり。また主が將に苦を受け、死に就かんとする由を門徒に語り聞かせ給ふ前にも豫め同様の備をば爲し給ひき。

吾人の世に處し、大事に臨むもまた斯くの如くなるを要す。斯くなすときは疑題を決するの識力大いに鋭く、義に趣き、事に當るの勢ひ盛んなるものあるべし。人若し日毎の務に就くに當り、靜かに神に祈りて豫じめ其の準備を爲さば、人生の車輪滑かに運轉し、百事宜しきを得んこと疑ひなかるべし。

ニコルスの基督傳百七十八丁より八十丁の處に大切なる議論あり、云く耶穌は重要なる事をなす前に祈りをなし給ひしのみならず。亦之れを了へたる後にも祈り給ひしなり。是大切なる教訓なり。我等非常の力を數して一大事を成し遂けたる時は己に我分終れりとなし、又先進の勇なし。人多くは功成り名遂げて万人喝采の間に其の生涯を送らんとを望む。彼れは功名の念に滿ちて余命を過すなるべし。凡そ一事を成功したる時は更に神に新しき力を求め、又そのなしたる事業に神の祝福を乞ふべし。耶穌は嘗て傲り給はず、又中途にして中止し給はず。只神に祈ることを廢し給はずして新しき事業に從ひ給へり。又傲ることは甚だ宜しからず。人は前日の質素と卑賤とを忘れ易きものなり。神と遠かるは、驕傲の念に魅せられたる時より甚しきはあらず。惡天使は驕傲の爲めに墮落せり。我等も亦此罪を免れ出でずんば同一の轍を踏まんとす。而して我等の驕傲を和らぐるものは、祈禱に過ぎたるものあることなし。父なる神と交はる時は驕傲は滅して跡なかるべし。又大事を成功したる後ちには、非常に疲勞を感ずることあり。人若し有らん限りの力を盡くしたる時は事業成功して我力盡きたりと思ふことあり。大群衆の前に立ちて說敎したる人は、其の熱心を注ぎ出して遂に非常に疲勞したる由を訴ふること屢々是れあり。而して之れが爲めに費したる氣力は、又快復するを得難しと思ふに至る。是れ自然の理なり。之れに處するの法は即ち基督を學ぶにあり。乞ふ祈りと禮拜によりて我等の泉源神に存することを覺知し、且つ我等の疲れたるを奬勵して更に他の高尚なる事業を執らしめ給はんことを祈るに至らんとな。

二、耶穌は多事多忙なるときに當りて懇ろに祈り、殊に祈りに時を移し給へり。福音書を見るに耶穌のもとに訪ひ來る人引きも切らず。或るときは實に飲食の暇も無き程にてありき。斯る時には殊更に長時間の祈りをせられたるがごとし。聖書に曰く、耶穌の聞ます〳〵揚りて許多の人々或は敎を聽んとし、或は病を愈されんとて集り來れり。耶穌常に人なきところに退きて祈りたまひきと。是れ多忙なる人等の注目すべき事實にあらずや。マルチン、ルーテルは必定多事ならんと思はるゝ日には、常より長き時間を祈りのために費やすを例としたりと聞く。急が

ば回れと言る諺い、眞に是等のことをいふならん。事務の垢塵侵し來りて、氣息繼き合へぬ時に際し、祈の水を洒ぎ懸るとき い、事を執るにも頗る愉快を感じ、之を辨ずる流るゝが如くならん。

三、基督の試惑よ遭はんとするや、必らず祈りを以て、之が用意を爲し給へり。ゲツセマヲ園當夜の景狀い、秘義を以て、充滿し、悲慘を極めたり。吾人之を想ふときい、慄然として怖れ震かずんいあらず。耶蘇曰く、是れ汝らの時なり暗きの力云々と。此れ主が魔鬼冥獄の權力と戰ひを挑むの時なり。最も怖るべき試惑の時なり。故よ園中の祈りを以て、其の準備をおしたまへるものなり。耶蘇の力い祈禱の力たりしなり。難に臨みて主い從容として騷かず、其温容威儼い、捕吏兵卒どもをして爲す所を知らざらしむるよ至れり。之よ異なりて、其の門人の狼狽遁逃して醜き狀態を爲せるい何故ぞ。彼等い主が目を醒して祈れと宣へるよ拘らず、祈りつゝあるべきときよ熟睡したればなり。嗚呼誘惑よ勝つは、唯祈禱の鎧を着するにあるのみ。赤裸よして大敵に當らんとするいまた危うからずや。

四、耶蘇い祈りつゝ死し給へり。其の最後の言い祈りの言にてありき。吾人は如何なる語とゝもよ此の世を去らんとするか。此い何人も知り得べき所に非ざるあり。されば平生祈禱の習慣身に熟したるより、最後のときよ臨み、祈禱の言自然口よ發する程あらい、如何に喜ばしきことにあらずや。

四

基督の履歴中、祈の應驗著るしきもの少からず。此所よい僅かに二つを擧げて、其の例證を示さんとす。

其の甲い聖容の變れることなり。路加此のことを記して云く此のことを言ひしのち八日ばかり過て耶蘇ペテロヨハネヤコブを携へ祈禱せんとて山よ登れり、祈れる時に其の顏の貌常に異なり其の衣服白く輝

きぬ。見よ二個の人ありて之と言へり。即ちモーセとエリヤなりと。思ふに耶蘇は其の容變り、其の衣輝きなんためよ祈りしにはあらず。また已の事業よ付き此ら両個の聖人と語り玉はん目的にもあらざりしならん。左れど祈りの驗應として斯る事をば獲玉ひしなり。或人い疑ひを爲して曰く、祈い直接に神の恩惠を獲さするの驗なし。左れど祈ると きい自ら心よ益を受くること少からず。一任神い無きにもせよ誠實を以て祈らば、其の利益あるい必然のことなりと。此れ何等の妄言ぞや。祈よ由り直接に神の恩惠い獲られじと明らかに知られたらんよい、千言萬言祈りよ費すとも何の益かあらん。また爭で誠實を以て祈ることを得べき。然れども祈りよ由りて心に益を受くることは實なり。吾等仰ぎて神よ願を奉ぐ。たゝそれのみよても、靈魂い高尚なる地位よ進むべし。基督一心一意神よ交親して餘念無く丹誠を凝らして祈り給ひしかば、歡喜面よ溢れ出で、神の榮光心に充ち、其の輝い容よまでも彰はれたり。モーセが四十日の間、山にありて降り來れるとき、其の容貌の光り輝きたるも、同一の理由よ出づるものなりとす。平生祈禱を專よするものは何人といへども幾分か之れと同樣なる感化を被ふるよ至る。此れ我等の實驗する所なり。

其の乙い耶蘇祈りよ由りて聖靈を受けたることなり。路加の禍音よ云く、民みな「バプテスマ」を受けゝるに耶蘇もまた「バプテスマ」を受けて祈れる時、天開け、聖靈鳩のごとき狀よて、其の上に降りぬと。以て之れを證すべきなり。耶蘇の人性い始より終りよ至るまで、聖靈よ依り賴みしものなるがことし、其の說敎よおいて、贖においてまた、奇蹟を行ふにおいて、みな聖靈の「インスピレーション」を力とせざることなし。我等若し其の跡を履み、其の業を續んと欲せば、同じく聖靈の感能よ依らずんばあるべからざるなり。たゝ如何よして之を獲んとするか。曰く汝ら惡き者なるに汝らの子よ善き賜を與ふるを知らば、汝らの天父い如何で之れ

を求むるものに聖靈を與へざらんやと。德も力も祈りの泉より流れ出つるものなり。

第八章　聖書の研究者たる基督

馬太傳四章四、七、十
同　五章十七、四十八
同　六章二十九
同　七章十二
同　八章四、十一
同　九章十三
同　十章十五
同　十一章廿一、廿四
同　十二章三—七、廿九—四十二
同　十三章十四、十五
同　十五章七—九
同　十九章八、十八、十九
同　廿一章十六、四十二
同　廿二章廿九—廿二、廿五—四十、四十三—四十五
同　廿四章三十七—三十九
同　廿六章三十、三十一、五十三、五十四
同　廿七章四十六

路加傳四章十六—廿七
同　八章二十一
同　十六章二十九、三十
同　廿三章四十六
同　廿四章二十七

約翰傳五章三十九、四十五、四十六
同　六章三十二、四十五、四十九
同　七章十九、二十二
同　八章十七、三十七
同　十章三十四、三十五
同　十三章十八
同　十七章十二、十四、十七

第八章　聖書の研究者たる基督

一

惟ふに耶蘇い三種の國語を解し給ひしならん。その自國語いアラム語と稱し、基督の唇より漏れたる幾個の碎片い、福音書中に存して今日まで傳はり來れり、假令へバヤイロの娘を生かし給ひし時よ發したるタリタクミの如き是れなり。されど耶蘇はその自國の語よて聖書を讀み給ひしとい多分之れなかるべし。新約書中に引用せる舊約の文は、時として今日よ現存せる各種の舊約書とは符合せず。此よ於て乎、憶測を下して云く、之れ即ち當時現存せしアラム語の聖書より引用したるなりと。されど是れ一箇の憶測たるよ過ぎざるなり。

耶蘇の用ゐし國語の他の一い、希臘是れなり。耶蘇の生ひ立ち給ひしガリラヤよは、所謂「異邦人のガリラヤ」たる希臘移住民多く、希臘語は、商業

上、その他宇宙主義なる社會交際上の用語なりき。當時ガリラヤに育ちし兒童は、希臘語を學習するの機會あると、猶ほ今日蘇國の高地に育ちし兒童の英語を學習するに於けるが如くなりしなるべし。偖基督の時代に於ける希臘譯の舊約書ありき。即ち七十人譯と稱して今日に傳はり來れるものなり。蓋し此名は基督紀元前二百年乃至三百年間に埃及に於て、飜譯の事に當りし記者の數多分七十人なりしといふに基けるなり。

該書は廣くパレステナに行はれ、新約の筆者は屢、之れを引用す。思ふに主も亦之れを讀み給ひしならん。

基督の解し給ひしと覺しき第三の國語は、希伯來語是れなり。是れ只推測上よりいふのみ。蓋し希伯來語は、猶太の國語なりしと雖、基督の降生前已にパレステナの用語たるを失ひたればなり。國語なるものは、往々其の自國に於てすら、廢り往き、他邦の言語と混淆してその固有性を失ふに至る。その近頃の例は以太利にあり。即ち同國にては時世の變遷に

從ふて次第に以太利語に轉化し、羅甸語は遂に死語となれり。以太利語はその古語羅甸に酷似せりと雖、今日同國の兒童は猶ほ英國の兒童の如く、之れを學習せざるへからず。パレステナにても右に同じき事を生じたり。舊約書の用語たる希伯來語は、轉訛してアラム語となり、原語にて聖書を讀まんと欲する猶太人は、死語を學ばざるべからざるとなれり。今耶蘇が此の語を善くし給ひしといふことを信するには、抑も理由あるなり。學者の觀察する處にては、耶蘇は舊約書を引用するに方り、時として故意に希臘語を遠ざけ、原語に據れり。又ナザレの會堂にて聖書を讀むの請を受け給ひしは、人々の記憶する所なるべし。惟ふに會堂の卷物は、希伯來語にて記されしなるべく、朗讀者は最初希伯來音にて讀み、後ち之れを國語に飜譯せしとなるべし。若し然らんには、耶蘇はその原語通りに聖書を讀まんとて死語を學習せりと思考するは、全く空想にあらず。記憶せよ耶蘇の人生に於ける地位は一箇の職工たるに止

より、ダビデの作りし詩篇、イザヤ又いエレミヤの紙よ成りし豫言書を讀むに、必要なる奇字奇文を學ひ給ひしも、眞よ勞働の寸隙を利用せしものなるを。英國よても之れと等しき神聖の望みあるものなしとせず。要するに五十年前にありては、原語にて新約書を讀まんが爲めに、機織る人も文法書を前よ置きて希臘語を學習したりしなり。又余いエヂンバラよ於て毎土曜日に希臘語の新約書を讀まんとて會合する商人の一群と談話を交へしとあり。今若し原語よ依りて聖書を讀まば、多少各種の飜譯を經過する間に散失せし香氣を見ると疑ひなし。而して方今の如き聖書を愛重するの風愈廣がり、之れを學習するの道愈容易き時に當り、之れを讀むの望あるもの甚だ多からざるい、怪しき限りといふべし。

耶蘇自ら一冊の聖書を所持し給はざりしと思ふ時い、我等心に痛いしく思ふ所なき能いずと雖、此の事の實なりしい、又疑ふべきよあらず。當時聖書を所持せんとせば、巨額の費用を要し、耶蘇の如き地位よ在りていい、絶えて望み得べからざるとなりき。且や耶蘇にして万一之れを所持し給ひしとするも、その卷帙の浩瀚なる、之れを持ち運ぶよ由なかりしならむ。但し此の寶典の若干部即ち詩篇若しくい、他の愛讀せし諸篇を其の家に藏したるなるべしと雖、耶蘇は神聖の智識よ對する飢渴を治めんとて、彼の熱心なる音樂者が會堂音樂係に乞ふて樂器の使用を求むるが如く、屢會堂よ足を運び身を卑くして番人に乞ひ辛ふじて堂内の聖書を讀むを得給ひしならむ。方今よ在りていい、聖書を得るの易き、何物も之れよ過ぎたるいなかるべく、小供と雖も、その一本を所持するを得べし。されどその廉價よして、且つ普通なるが爲めよ、平凡の物品と同一視するに至らざらんとこそ望ましけれ。

無論耶蘇の讀み給ひしい舊約書のみなり。此の事實を記憶すれば、方今の如き舊新約合卷の聖書を更らに愛重するの理あるとを知るを得べ

し、余や詩篇を讀んで、書中下の如く神の道に對して感情の爆發せるものあるを見る。曰く『われなんぢの法をいつくしむことといかばかりぞや。われ終日これを深く思ふ』『みことばの滋味いわが喇にあまきことといかばかりぞや、蜜のわが口に甘きよまされり』『これを黃金よくらぶるも、おほくの純精金にくらぶるも彌增りてしたふべく、之を蜜よくらぶるも蜂のすの滴瀝よくらぶるも、いやまさりて甘し』と余い斯る聖き感情の爆發せるものを讀み、只舊約書のみを有し、又舊約書の中にても、恐らくいその若干部のみを有し、その聖書よい福音書なく、保羅の書翰なく、默示錄なく、山上の垂訓、放蕩息子の譬喩、約翰傳十七章、羅馬書八章、哥林多前書十三章希伯來書十一章等を讀みしことなき人の唇より出で來れるものなるを思ふ毎に、余い自ら余が所有せる完全なる聖書よ對するの感覺如何を問ひ、且つ自ら已れに告げて云く、近時の人心已に化石となり、感戴喜悅の泉源い、枯渴して、嘆美熱心の火い滅え亡せたり。斯くて遙かに完全なる聖書よ對するの感情も比較的に緩慢となれりと。

二

耶蘇、神の道を深く學び給ひし證據い、疑ふべからざるものあり。そは明らさまよその事實を開陳せる證據よりて知るのみよあらず、之れよ比ぶれば更よ勢力著しき一種の證據あるなり。福音書中に見えたる耶蘇の言にい舊約聖書を引用するもの甚だ多し。時としてい、明かに引用の書名及び箇所を示せるものあり。然れども多くい舊約の出來事、人物等を引き、若しくいそれと云いずして自ら舊約の文を已が陳述する言の經緯よ織り込みたるものあり。此を以て見れば、基督の心よ舊約書の浸染すること深く、その想像は、常よ舊約の情景に神馳し、その思想も言も自ら舊約の字句よ摸造せられたるものなるを知るべし。

基督の引用し給へる文を閲すればその出所い、舊約の全部に渉れるとを見出すべし。基督はその重立ちたる事柄を熟知し給へるのみならず、

容易ゝ目ゝ付き難き所までも通せざるとなきゝ似たり。されば我等舊約書中何れの部分を渉獵するも、基督の祝福せられたる御足は、我等ゝ先だちて其の處を歩み給ひしとなるを確知するを得るなり。されど聖書を讀むに當り、或一節ゝ至り、こは基督の引用し給へるものなり、今我れの唇に擧げんとする器より、基督も曾て生命の水を飲み給ひしなりと思ふ時い、如何に愉快なることならずや。それが中にい、基督の最負し給へるものといふべき文あり、何ものとなれば、之れを引用すること度重なりたるが故なり。申命紀、詩篇、以賽亞書の如きい主として聖書の中ゝても、基督の殊ゝ愛し給へるものなりと見ゆ。

余曾て或亡友の書類を取り調べしことあり。凡そ此くの如き事業い甚だ感慨を催ふすとなるは人の能く知る處なり。亡友の生存中の秘事を爆露し、その人物の眞相を領知するい、殆んど褻瀆の嫌ひありて、又忍び難きの思ひなきを得ず。我友は、此の活世界の事務ゝ當れる人にて、凡そ業を營み、世の俗輩と交際するものゝ、遭遇する幾多の誘惑ゝ出遇へり。然れども彼れば能く宗教家たるの本職を維持して毫も之れゝ傷くることなかりき。今その遺せる書類を調ぶるに方り、余い彼れが宗教果して外面の粧飾なりしか、將た實ゝその衷心より發育し來れるものあるやを探知するの機會を得たるあり。余い之れを調ぶるに隨つて、亡友の宗教思ひしよりも根據深く、新鮮なるものあるの證據を彌が上に發見せり。殊にその聖書を開き見し時の如きは、此の事ゝ就き紛ふべからざる證據を見出せり。その紙は傷損し、貴重なる本文ゝい圈点を付し問、その感したるとを簡端ゝ付記せるもの少からず。久しく丁寧ゝ聖書を愛讀研究したると知るべきなり。書中殊ゝ屢讀みたるものと見ゆる所あり、舊約ゝては詩篇、以賽亞、何西の如き、新約にてい、約翰の著書の如き、尤も然りとす。此に於て、余はなき教に入れる生命の實在を確認し、その德の發出せる淵源を知るを得たりき。

斯の如く此の人の聖書の樣子い、其の尤も秘密なる習慣の記錄なるべく、且つ跡に生き存らへたるものゝ爲めゝ、其の人の宗教家なりしか、將た非宗教家なりしかを示す紀念標たるなり。生けるものゝ爲めには、その宗教上の有樣を伺いんと欲せば、遺書を檢するゝ過きたるものあらず。蓋し之れを使用せしと、或い放棄せしとの記號によりて、彼れが之れを愛せし乎。將た然らざりしかを知るを得ればなり。余い朋友の聖書の白紙の部分より神の道を眞に愛好せし泉源を說明するに足る數語を寫し取りたり。曰く、嗚呼望むらくい、基督ゝ近づき、神ゝ近づき、聖きに近づき得んとを。日々彼れゝ於て、彼れゝよりて、彼れの爲めゝ、又彼れと共ゝ益〻完全なる生活をおさん。基督在し給ふ。我れ基督なくてあらるべき乎。我れを潔め玉ふ。我れ何時までも、汚れゝ在るべき乎。父の愛あり、我れその一族の外ゝ流浪してあらるべき乎。天國あり。我れ之れより退けらるべき乎と。

三

益ある樣ゝ聖書を研究するゝい、種々の方法あり、之れに關しては、耶蘇の口より特別の敎訓を垂れ給ひしゝあらざれども、其の言行錄によりて、皆之れを實行し給ひしことを見るなり。

之れを研究する方法の如何ゝより、神の道い種々の要用をなして、靈性的經驗を助くるものあり。甲なる方法は、甲種の用をなし、乙なる方法は、乙種の用をなすが如き是れなり。耶蘇い之れを用ふるゝ方りて、其の熟練を表いし給へり。我等之れによりて彼れが如何ゝ之れを研究せしかを推究するを得べし。

耶蘇の聖書を用ゐ給ふにい、三要點あり、我等之れゝ倣ふこと頗る大切なり。

一、防禦の爲め

我等の見る所にてい、基督が神の道を用ゐ給ひし第一點い、誘惑ゝ對す

る防禦となせしと是れなり。惡魔彼れに來りて之れを野にて誘ふや、必ず聖書より『錄されたり』といふを以て答へ給へり、神の道い基督の手より在りてい、靈の劍にして、此の刄を以て敵に向ひ給へり。

又耶蘇い之れを以て惡しき人の攻擊を禦ぎ給へり。即ちその言質を取りて耶蘇を陷れんとする人に遇へば、神の道を以て說き破り、特より其の世を辭せんとする前に於てい（廿馬太傳二章）衆敵鉾を篠めて至り、異派の巨魁力を究めて之れを迷はし、之れを駁せしが、耶蘇い聖書を以て之れに當り、遂に口を閉ぢしめ、且つ神の道の好解釋者たるべき身が、却て聖書より明かならざるとを示し、衆民の面前に其の耻を曝らさしめたり。

茲に他の種類の敵あり、耶蘇之れに對するに亦聖書の武器を以てし給へり。是れ即ち最後の敵あり。死の恐嚇は、已より耶蘇の四邊より迫り、恰も孤城落日の觀ありし時、彼れは得手なる兵器の助けを借り給へり。十字架上の七言中、少くとも二言丈けい、其の愛讀し給ひし詩篇の句あり。其の中、一は彼れが最終の言あり。彼れは之れを以て死の喇より其の靈魂を拔き出し給へり。即ち云く、父よ我靈を爾の手より託くと。

防禦の爲めより聖書を用ゐんとする時い、之れを暗記すると必用なり。余い常より思ふ。耶蘇は聖書の句を藏めたる記憶の倉庫に訴へ、其の時機より應したる、必要の兵器を立どころより見出し給ひたりと。誘惑の來るや、往々之れに應ずべき聖書の語句を求むるの暇なきとあり、手に劍を放つとなくして、絕えず心搆へをなし置くい、心勝の良策なり。之れに依りて之れを見れば、少時記憶の盛なるより當り、聖語の財寶を以て記憶の倉庫を充たし置くの心掛必用なり。他日若し試みより會ひ心細く感ずる時より當りて幾何の用をなすや未だ豫しめ測り易からざれいあり、依りて日々聖書を讀むに當りて一章を終へたる時は、或一節を撰んで特より之れを記憶より止め置くと甚だ善し。是れ啻に全章より關する注意を銳くするのみならず、又他日戰鬪をなすの軍器あるを以てあり。

二、インスピレーションの爲めよ

基督が舊約書を參酌し給ひしより見る時ハ、舊約書中に記述せられたる大人豪傑の精神中よ其の身を置き給ひしと明かなり。基督ハ世よ在りて非常よ冷遇を受け、已れの家よ在りてすら、信用せられざりき。又其の鄉國ハ當時姦惡ある世よして、深く彼れをして感動せしむべき事變にも常に相關せざるが如く、加ふるよ耶蘇の弟子すらも、其の精神及び靈魂は、甚だ幼稚なりしかば之れをして己れの思想を理會せしめんが爲めよ面倒ある教練を要せしあり。故よ基督の如き重荷を負へる情緒は友を求むるよ急よして、僅かに之れを過去の大人中よ求めざるを得ざりき。耶蘇ハ聖書の閑林中に在りてアブラハム、モーセ、ダビデ、エリヤ、イザヤ、及び其の他の諸英雄に接し給へり。此の人々の世に在るや、其の目的耶蘇に異なるものあるとなく、耶蘇の困み給ひしが如く彼等も困みたりしにて、耶蘇ハイザヤの語を借り來りて直ちに已れの狀態を人よ示すを得たりし程なり。何となればエルサレムハ耶蘇を迫害せる如く、豫言者をも迫害して之れを殺せるものあればあり。故よ耶蘇ハ聖書を讀んて過去の人物に近づき、常に其の思想中に之れを活動せしめ、大人中の大人たるモーセ、エリヤの二人をして實際肉眼界よ立ち還らしめ、變貌山よ於て之れと相語れり。されど此の會話ハ先きよ數百回の多き、聖書の紙面よ於て此の二人及び他の豫言者と相見えし最高の一點よ過ぎざるなり。

インスピレーションの爲よ聖書を用ゆるには、防禦の爲めに用ふるとハ別なる研究法を必用とす。防禦の爲にするにハ、或文章を言の儘よ記臆するを、必用とすれども、インスピレーションの爲よするよハ、更に廣く研究する所なかるべからず。始めより終りに至るまで一人の生涯を腦裏よ會得せざるべからず。斯る人傑を生せしめたる時代とそれが戰を挑みし境遇の如何を知らざるべからず。其の當時の大勢を明かよし、

且つ此の中に在りて運動せし人物の如何を知り得るまで、其の人を研究せざるべからず。之を研究して遂に其の人の言語應對に於ける特質までをも熟知するに至らざるべからず。已に斯くの如くなる時は、其の人は即ち我等の物なり。彼れは我等と共に歩むべく我等に語るべく、我等の伴侶我等の朋友たるべし。是れ即ち聖書を知れる基督信者たるものゝ特權なり。假令ひ如何なる境遇に處る人にても已を移して最善なる人の友とあらしむるは、心の儘あり、若し此の地位に達すれば、我等の額は高貴なる冠を被り、我等の眼は勇氣を以て輝き、又其の風采は、信仰と望と愛とを以て馨しかるべし。

三、嚮導の爲めに

耶蘇は聖書を以て生涯の海圖とおし給へり。博學敬虔の人々、耶蘇は何歳に已れの「メサヤ」たることを熟知し且つ如何程已れの生涯の行路を明かに悟り、又如何なる點に於て已れは(一例を擧ぐれば)凱旋者にあらずして困める救主なるを知りしや等の諸問を論究す。斯くて彼等は想像すらく、耶蘇は已れに關する舊約書の豫言を研究して之れを知りたるなりと。余は未だ曾て斯る推測を適當なりと感せしことあらず。斯る事柄は神と人と一つになれる基督の秘義の幕中に掩はれ居るものと余は考ふるなり。されど耶蘇は其の行路を進むに、設令へば海圖に於けるが如く、熱心以て舊約の豫言を手取り給ひしとは、其の聖言によりて容易く知らるべし。耶蘇が甲事をなし、又乙事をなすに當り、是れ豫言に應せんが爲めなりといへるとは、其の幾度なるを知らず。施洗者約翰の遣せる使に對し、又其の他の人に對し、イザヤ若しくは其の他の豫言者の略寫したる「メサヤ」の活畫は、耶蘇の生涯と符節を合するが如きものなるを指示し、復活後弟子等と交際し給ひたるは、首としてモーセ及び其の他の豫言者によりて、彼れの生けるも苦しめるも、死せるも皆全く豫言に應せんが爲なりといふことを示さん爲めなりと見ゆ。

斯くの如くに聖書を用ゐんには、前に説明せし防禦若しくはインスピレーションに用ふるに必要なるものよりも更に進歩せる研究法を要するなり。即ち先づ聖書の綱領を會得し、その本末を貫通せる潮流を考へ、殊に支流の悉皆朝宗する大中央潮流を明にするの力を要する也。

是れ寔に耶蘇の聖書を研究し給ひたる方法なり。耶蘇は能く其の大体を領得し、只一つの文章を用ゆるに當りても、尚ほこの方法を用ゐたりといふものあるに至る。耶蘇の引用をなすに當りて、古來人の思ひ寄らざる深意を發揮せしめざるとなし。古往今來斯る能力を有せるもの極めて稀なり。諸君説教を聽く時稀れに經文を引用して、之れを自説に變形せしめ、珠の如き光輝を發せしむるものあるを見るならん。此の能力を授くるものは、何ぞや文意を尋ねて深く下り、遂に文章の裏面に潜める光の一大湖に探り當りたる時初めて之れを得べく、而して後ち此の光輝の湖中より燃え上り、裏面に現れ出づべし。

我等の離れ〳〵の文章を讀んで之れに滿足を表すること、餘りに容易なるの弊あり、一句の與ふる刺激興奮の原とより貴重なりと雖(我等若し本末を通讀して其の大意を領得する時の)聖書の全篇は、更に之れに勝れる功あるなり。是れより我等は次第に諸書を渉獵し、時として一の問題に付き、其の訓解を聖書の全体に求むるも可なり。我等信仰と、行ひとに關する聖書の訓解の全体を窺ふことを勉めざるの理あるべけんや。

聖書の嚮導の完美なるものの、耶蘇のなし給ひし如く、我等生命の海圖として之れを探究するにあり。其の方法の耶蘇がその豫言せられたる自己の歴史を發見したるとは異なれども、又道理に戻るの憂なくして我等その中に、自己の形体肖像を發見するを得ん。聖書の教訓、約束、摸範中に我等己れのなすべきすべての行爲、決定、方針の如何を見ることを得べし。又我等の行ひ若し聖書中に記されたるが如くならば、基督のことは皆聖書に應せんが爲なりと宣ひし如く、公言するに差支なかるべし。

されど若し熱心より斯る順序を履みたらんにハ、愈〻耶蘇の聖書研究法より近づくを得べし。蓋し聖書の本末を貫通せる大中央潮流より乗せしむると疑ひなければなり、大中央潮流とは何ぞや、云く、基督を除きてハ、其の他より何物も存するはあらず。凡そ舊約書中の細流小川ハ、直ちに基督の十字架より向つて注ぐ。新約書の全体ハ、是れ基督の活畫より外ならず。世人よ、神の道より於て生涯の眞方向を求めよ、さらバ、如何なるも、救主の創より、よりて亡びたる罪人として其の憐れみを求めんが爲め、未だ十字架より達するとなくして止むとあらじ。一たび此に滅ふる時ハ更に立ちて眞行路を求めよ、此より於て乎、彼れは必定行方に高く聳え、尊ふさ、畏てさ、限りも知られずされど又我れを打ち招き給ふ人なる完全の肖像基督耶蘇を見ざるとなかるべし。

明治二十四年七月一日印刷
明治二十四年七月二日出版

（定價二十五錢）

譯者　東京麹町區富士見町五丁目九番地　植村正久
同　東京芝區明舟町十九番地　田中達
發行兼印刷者　東京深川區相川町二十番地　山内量平
發行所　東京麹町區三番町十番地　南海堂
發賣所　東京々橋區築地二丁目二十二番地　一二三館
關西大賣捌所　大阪西區土佐堀三丁目　福音社
印刷所　東京日本橋區上槇町十六番地　八重洲橋印刷會社

版權所有

福音新報

毎金曜日發行

社說 信仰上、神學上、社會上に關する斬新有益なる論說を掲ぐ

說教 大家の說教を坐ながら聞くの便利あるべし

論說 神學界の動靜に關する忠實なる案なり

教報 全國各地の教況蒐めて此の一欄よあり

其他家庭史傳雜錄外信等總べて靈魂の滋味なり

發行所

東京麹町區三番町十番地

福音新報社

福音新報定價表

前金	市内	一部	二錢五厘
	無郵税	十三部三ヶ月分	卅一錢五厘
		廿六部半ヶ年分	六十錢
		五十二部一ヶ年分	一圓十四錢
	市外	三	八錢
	郵税	七十三錢	
	共	一四四十錢	

政治 文學 宗教 經濟 社交 上の 要報 評論

日本評論

（毎月二回十日廿五日發行）

日本評論は黨派の機關よりもあらず、金錢の奴隷にもあらず。眞理を發揮するを以て其の目的とし、正義を唱導するを以て其の任とす。世に媚び、時に投するは一讀せよ。

江湖の諸士願くは余輩の尤も拙しとする所なり。

日本評論定價表

前金	市内無郵税	一冊六錢	
		六冊卅三錢	
		十二冊六十四錢	
		廿四冊一圓廿錢	
	市外郵税共	六錢五厘	
		三十六錢	
		七十錢	
		一圓卅二錢	

發行所

東京麹町區富士見町五丁目九番地

日本評論社

特18
749

基督のすがた
前

国立国会図書館

020576-001-0

特18-749

基督のすがた

ゼームス・スタウカル／著

1冊（335p）
M24

ABI-0390